CLA-アーカイブズ 29

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り

――慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後――

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター主催

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り

──慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後──

目次

はじめに……3

日吉キャンパス：学習相談アワー……4

矢上キャンパス：S-Circle……9

SFC キャンパス：WRC（ライティング＆リサーチコンサルタント）……17

全体ディスカッション……25

コメント（長谷山常任理事・清家塾長）……31

おわりに……35

附録：学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特徴……37

教養研究センター「学びの連携」プロジェクト 公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り

──慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後──

日時：2013 年 3 月 18 日（月） 14：00 〜 17：00
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階　シンポジウムスペース

日吉・矢上・SFC の 3 キャンパスでは、慶應義塾をより生き生きとした学びの場にするために、塾生による塾生のための学習・生活相談活動が展開され、大きな成果を 挙げています。

今回の公開セミナーでは、はじめて 3 キャンパスのピア・メンターとコンサルタントが一堂に会します。各キャンパスの特性に対応したユニークな活動方針と内容、学生たちを引きつける工夫、相談者の悩みを言語化してもらうテクニック……ざっくばらんに語ってもらいましょう。また、より多くの人々を巻き込み、慶應義塾全体の取り組みにステップアップするには何が必要かを考えます。

各地区ピアサポートプロジェクト

●日吉キャンパス：学習相談アワー

間篠剛留（社会学研究科：博士）
松下港平（経済学部 4 年）
松本友也（文学部 3 年）

http://www.hc.lib.keio.ac.jp/studyskills/consultation.html

●矢上キャンパス：S-Circle

荻野幹人（理工学部 4 年）
伊藤奈保（理工学研究科：修士）
アブドゥル ラズィズ（理工学部 4 年）
野呂隆之（理工学部 4 年）
原歩未（理工学部 4 年）

http://keio-s-circle.jp/

● SFC キャンパス：WRC（ライティング＆リサーチコンサルタント）

天笠邦一（政策・メディア研究科：ポスト・ドクター）
直江健介（政策・メディア研究科：ポスト・ドクター）
内藤寛子（政策・メディア研究科：博士）

http://wrc.sfc.keio.ac.jp/

※ 当日発表者の所属は発表当時のもの

はじめに

教養研究センター副所長・商学部教授　種村和史

本日は、「学びの連携」プロジェクト第4回公開セミナー「塾生による塾生のための半学半教の場作り」にご参加くださいまして、まことにありがとうございます。慶應義塾の日吉、矢上、SFCの3キャンパスでは、学生が学生の学習、研究、生活などの相談に乗るというピア・サポート活動が展開されています。本日の公開セミナーは、それぞれの活動について御報告いただき、今後の連携の可能性を考えるために企画されました。

「半学半教」は、言うまでもなく慶應義塾の研究教育を特徴付ける重要な理念として内外に広く知られています。ところで、それではよく半学半教を具現化した活動とは何か、言い換えれば、日本あるいは世界の他の大学と異なる慶應ならではの半学半教の活動とは何かと考えましたとき、私は本日のテーマでありますピア・メンタリング・システムこそその最もよい例となるのではないかと考えております。

現在、日本の大学においてピア・メンタリング・システムの重要性が認識され、さまざまな大学で実践が行われています。それらと比べましても、慶應義塾の3キャンパスで行われております活動を総体として見た場合、慶應義塾のピア・メンタリング・システムというのは、ほかにはない極めてユニークで優れた特徴を持っていると、この公開セミナーの準備をしていく中で、私は実感いたしました。

一つは活動の多様性です。3キャンパスのピア・サポート活動は、それぞれのキャンパスの特徴とニーズに基づいて展開されています。そのために、いずれの活動も非常に特色豊かなものとなっています。この特色ある3つの活動を連携させることができたとしたら、慶應義塾のピア・サポート活動は、対象とする相談者・相談内容・またそれに対する取り組みという面で他に類をみない多様性を持ち、カバーする範囲の広いものとなり得ます。

もう一つは、学生の自主性です。3つの活動ともピア・メンターの強い主体性に支えられて展開されています。本来の相談活動はもちろんながら、それを支援するためにどのような活動が必要かをピア・メンター自身で考え協議し実施しています。そのような彼らの主体性によって活動の豊かさが実現されています。これはまさしく「半学半教」の名にふさわしいものであり、今後のピア・サポート活動を発展させていくための推進力として、慶應義塾が誇るべき力です。

この2つの点において、慶應義塾のピア・メンタリング・システムは優れている、そして今度さらに優れたものになり得ると私は考えています。

このことは、これから3キャンパスそれぞれの活動の報告をお聞きいただく中で、皆様にも得心いただけるのではないかと思います。このユニークで優れた活動を育てさらなる発展に導くことが、慶應義塾の半学半教の内実を豊かなものにするために、きわめて重要です。

しかしながら、これまでのところ3キャンパスの活動は、孤立した形で行われてきました。ここで孤立的と言いますのは、1つには、キャンパス間の連携や協力がなく、それぞれが独自に活動を進めてきたということですけれども、もう1つには、大変重要な活動でありながら、教職員や学生間での認知度がまだ低く、義塾全体が支える活動となっていないということでもあります。この2つの意味での孤立性が、活動のあるべきさらなる発展というのを阻んでいるのが現状だと思います。

本日の公開セミナーは、このような問題意識によって企画されました。3つの活動について報告をしていただき、情報共有をすることで、今後どのように連携できるかを考えたいと思います。それと同時に、慶應義塾という視点でピア・サポート活動を考えることの重要性を内外の方々に知っていただき、これについても今後、何ができるかということを考えていきたいと思います。

＊巻末に、慶應義塾のピア・メンタリング・システムの意義と今後の展望を考える参考とするために、日吉の学習相談員である間篠剛留君の論文「学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特等」を掲載しました。

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り

日吉キャンパス：日吉学習相談アワー

間篠　社会学研究科の博士課程に所属しております間篠と申します。本日は、日吉学習相談アワーについてまず大まかな概要を説明させていただき、その後で模擬相談を実演し、それを踏まえた上で、日吉学習相談アワーの特徴を整理して、最後に課題を検討していければと思っております。

【日吉学習相談アワーの概要】

まず、日吉の「学習相談アワー」とはどういった活動なのかということを説明します。教養研究センターの開設科目に「アカデミック・スキルズ」があります。これは、大学での学び方ですとかレポートの書き方、プレゼンテーションの行い方などを少人数のセミナー形式で学ぶ科目です。この授業を修了した学生の有志が学習相談員として学生の学習に関する相談に対応するのが「学習相談アワー」です。

大きな特徴は 3 つあります。まずは 2、3 年生を含む学部生が相談を受けている点。教養研究センター、日吉メディアセンター、それから学生という三者の協働で成り立っているという点。また、相談の経験を生かして、学生が主体的に展示企画や公開講座を行っているのも特徴と考えられると思います。

実施場所は日吉の図書館レファレンスデスクです。図書館に入っていただいて、中央の目立つところにレファレンスデスクがあるのですが、こちらで相談を行っています（図 1-1）。デスクは ITC スチューデントヘルプデスクと、それからレファレンスデスクとくっついていまして、図書館のレファレンス職員の協力も得やすいような状況になっています。

【実施状況】

まず、2008 年の秋学期に週 1 回、午後 1 時から 6 時の時間で実験的に開設されました。その後は、2009 年度から、月曜から金曜、毎日同じ時間帯で実施しています。相談件数ですけれども、徐々に増加してきているというのがお分かりになるかなと思います（図 1-2）。2009 年の春と秋では、実施日数を倍以上にしたということもあって、一気に件数が上がっています。そこから先は春、秋、春、秋とでジグザグになっていまして、どうしても春学期の方が初めてのレポートというのが多いので、秋学期は相談件数が少なくなるという傾向はどうやらあるようです。ただ、春学期の方の数字だけ見ていきますと、相談件数は着実に増えて、認知度も上がっていっているのではないかと考えています。

【相談内容（代表的なもの)】

寄せられる相談で代表的なものをいくつか挙げてみます。

・はじめてのレポート課題が出され、何をどうしてよいかわからない
・レポートの論は立ったが、その根拠を支える適切なデータが見つからない
・参考文献の扱い方がわからない（自分の意見との書き分け方、書誌情報の書き方など）
・資料はある程度見つかったし、読み込みもしたが、どうまとめてよいかわからない

最も多いのは「初めてのレポートが出されたが何をどうしていいのかよく分からない」というあたりでしょうか。レポートというのはいったい何だというのが分からないまま、レポート課題に取り組む。その中で、どうしたらいいのかよく分からない、そういった学生が相談に訪れます。

参考文献の扱い方が分からないという相談も多いです。「自分の意見と参考文献、どうやって書き分けたらいいのか」、「参考文献を使えと言われたから参考文献を使ったら全部引用になってしまうのだけれどどうしたらいいだろう」といった質問。それから、最も基本的なところで、「引用するときにどういった情報を書いておけばいいですか」、「参考文献の書き方ってこれで合っていますか」という短めの質問などというのも多くあります。

図書館のレファレンスデスクで、レファレンスの方と一緒に行っているということで、こういった相談も来ます。「レポートの論は立ったけれども、その根拠を支えるような適切なデータであるとか資料が見つからない」、「こういったデータがあればレポートとして完成するけれども出てこないんです、どうしたらいいでしょうか」。こういったパターンは結構多いです。

それから、資料はある程度見つかったし、読み込みもしたけれど、どうまとめていいのか分からない。ある意味で、さっきの相談と逆ですけれども、資料が見つかり過ぎてしまって、うまくまとめられないといったような相談が寄せられております。

図 1-1　学習相談コーナー（日吉図書館レファレンスデスク）

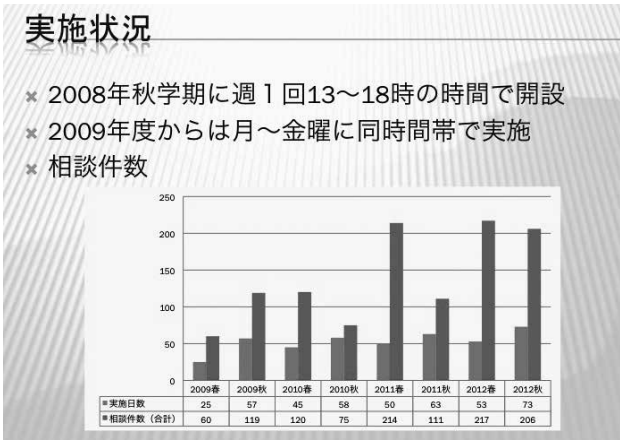


図 1-2　学習相談コーナー（日吉図書館レファレンスデスク）

さて、こういった概要を説明した上で、日吉学習相談アワーが実際にどのように行われているのかということを、皆様の前で実演をしてみようと思います。実際にどういった形で相談をしているのかということを皆様に見ていただければなと思っております。

＜学習相談アワー：模擬相談──省略（図 1-3）＞

こういった形で相談が行われているのかというイメージが何となくわいたのじゃないかなと思います。

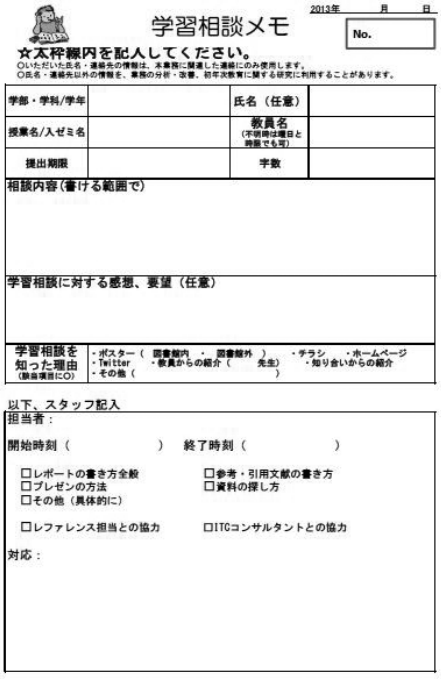
さて、模擬相談の中でいくつか出ていたものについて説明を補足としておこうかなと思います。まず最初に、相談員が「学習相談メモ」を書いてくださいと言ってましたけれども、「学習相談メモ」とは図 1-4 のようなもので、上の大きい四角の中にその学生さんの相談内容ですとか、どんな授業で出たレポート、課題なのかということを書いていただきます。そして相談が終わった後

に、どんな対応をしたよということを対応した相談員がスタッフ記入欄のところに書いていきます。

これをファイルとして残しておきまして、それをほかの相談員が見て、どういう相談に対してどう対応したのかということを学べるようになっています。また、どういった授業でどういった課題が出ていて、どういう相談が多いのかということを検討するようなことにも使えています。

それから、先ほどの模擬相談で相談員を担当した松下君が相談者に「後でパソコンに書いておきますので」と言っていましたが、これは相談員が使っているExcelファイルの連絡帳です。その日の感想ですとか、あとはこんな提案をしたいということも含めて記入してもらって、それに対する応答をほかの相談員が自由に記入するというコミュニケーションツールです。この中に、「今日はこういった相談があって、また相談に来ると思うのでよろしくお願いします」と書いておくこともありますし、「こういうムードで大変だった」とか、「こんな相談がありましたが、皆さんだったらどう対応しますか」と、この上で相談したりすることも行っています。

図1-3　模擬相談の様子
（上）相談員が学生の目線からアドバイス
（下）専門的内容は図書館のレファレンススタッフがサポート



学習相談メモ

2013年　月　日　No.

☆太枠線内を記入してください。
○いただいた氏名・連絡先の情報は、本業務に関連した連絡にのみ使用します。
○氏名・連絡先以外の情報を、業務の分析・改善、初年次教育に関する研究に利用することがあります。

学部・学科/学年		氏名（任意）	
授業名/入ゼミ名		教員名（不明時は曜日と時限でも可）	
提出期限		字数	

相談内容（書ける範囲で）

学習相談に対する感想、要望（任意）

学習相談を知った理由（該当項目に○）　・ポスター（図書館内・図書館外）　・チラシ　・ホームページ　・Twitter　・教員からの紹介（先生）　・知り合いからの紹介　・その他（）

以下、スタッフ記入

担当者：

開始時刻（　）　終了時刻（　）

□レポートの書き方全般　□参考・引用文献の書き方
□プレゼンの方法　□資料の探し方
□その他（具体的に）

□レファレンス担当との協力　□ITCコンサルタントとの協力

対応：

図1-4　学習相談メモ（見本）

【学習相談のルール、注意点】

それから、学習相談のルール、注意点です。最初に相談者に、添削はしてないんですよと断っていましたが、レポートの代筆にならないように注意するということを相談員の中で共通認識として持っています。相談員の考え方を押し付けないということもこれには含まれています。相談員はレポートというものが成績評価の対象であるということをちゃんと意識しておかなければならないというところですね。

それから、自分たちが対応できる相談と、そうでない対応とを切り分ける。例えば専門的な部署があるところであれば、そちらにお任せします。心理的な悩みだったり生活上の相談があれば、学生相談室がありますし、履修に関する問題、履修の制度上の問題に関しては学生部の学事担当の方に行っていただくとかです。

あとは、不確定なことを断言しないということですね。こう書きなさいと言って完全な型にはめてしまうというか、学習相談員の構想がそのまま提出にならないようにすることはもちろんですし、あいまいなことはここで言わない。調べてみましょうと言ってデスクで相談者といっしょに調べたりしたりですとか、あとは隣のレファレンスの方と協働して調べていったりしています。

【日吉学習相談アワーの特徴】

・学部学生が相談員の中心を担っている
・教職員と学生の連携
・相談の経験を生かして、相談員が展示企画や公開講座を行う

※ 詳しくは附録論文を参照のこと

この 3 点が日吉学習相談アワーの大きな特徴としてあると思いますが、このうち上の 2 つは模擬相談からも、見ることができのではないかと思います。

【学部学生が相談員の中心】

まず学部学生が相談の中心ということについてお話します。日吉学習相談アワーの相談員には、大学院生も何人かいますが、学部の学生、特に 2、3 年生が多数を占めているということが大きな特徴としてあります。ほかの大学では、学部 2、3 年生を学習相談員として起用しているところはあまり多くないように思います。

日吉学習相談アワー相談員の構成（2012 年度）

＊院Ｄ３：１人、 Ｄ２：１人、 Ｍ２：１人
＊学部４年生：４人（文 1、経 2、商 1）
＊学部３年生：５人（文 1、経 1、法 2、理 1）
＊学部２年生：４人（文 3、法 1）
⇒学部２・３年生が多数

全国的な展開を見てみますと、学習面でのピア・サポートの活動の動向を整理してみますと、大学院生が中心として行っているか、学部学生が中心として行っているかという軸と、相談の内容、相談の領域を限定していくか、広範に相談を向けるかということで、4 つに大きく分けられるのかなと思います。

学業面での支援を行うという場合には、相談員は大学院生が担当することが多くなっています。学部学生が学習の相談を受けるということもありますが、その場合には、例えば TOEIC 何点を取った上で英語の相談員をやりますとか、相談内容や領域を限定していく。それから研修を強化して知識や経験を補っていくということもありますし、また学習面に加えて、生活面を重視していく

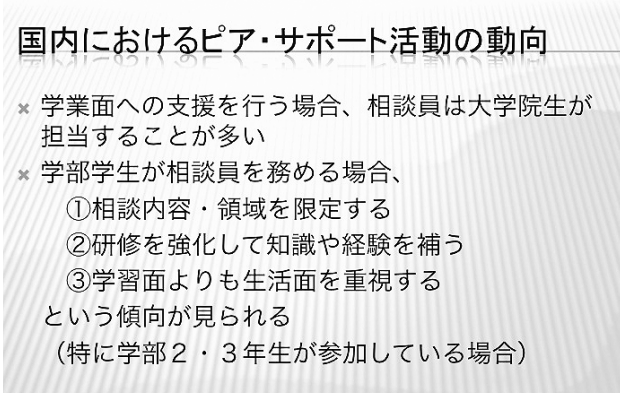


図 1-5　学部生のピア・サポート活動

ということによって、中心点を学習から生活の方にずらしているような傾向が見られます。特に学部 2、3 年生が参加している場合には、こういった 1、2、3 のどれかの型が使われることが多いようです。（図 1-5）

一般的に、学部学生が相談を受けるというところでは、やはり相談者の目線に近い、相談しやすいというのは利点としてありますが、どうしても知識や経験の不足というのが問題として挙げられています。それを研修などで対処する、あるいは学習面も相談を受けるけれども、生活面でのアドバイスを中心にするというのが基本なのかなと思います。

ただ、研修やマニュアルを充実させていくというところに頼り過ぎてしまうと、知らなければ答えられない、力にはなれないんだという態度にもつながっていってしまうのではないかと考えます。もちろん大学院生の相談員がいて、しっかりとした知識を持って、その上での相談を行うというのは意味があることですが、じゃあ、2、3 年生が相談を受けるということの意味を考えるとしたら、このあたりを考えていかなきゃいけないのではないかと思います。

そうすると、知識や経験の不足というものを欠点としてとらえるのではなくて、それがあってこそできる相談というものがあるのではないかということになります。我々相談員は積極的に相談者の話を聞きます。相談者に説明してもらいます。相談者が書いたレポートやノートを見せてもらうこともありますが、その場合でも、相談者に内容を説明してもらう。説明させざるを得ないのですね。相談員が学部 2、3 年生ですと、その科目については相談しに来た学生の方がよほど知っています。そう

すると、相談員は科目の具体的な内容については知らない状態で、でも相談を受けていく。そのときにどうするか。相談者に説明をしてもらうわけですね。

自分自身で、今こういうことをやっているんだと、あらためて声に出してもらうわけですね。そうすると、相談者は自分がどこでつまずいているのかということを自分で確認できます。じゃあ、相談員の側はどうかというと、専門外の分野でも教え合い、そして聞き合える関係というものを構築できるということを実感できるわけです。先ほどの演者の松下君も、相談者のレポートのテーマである奨学金の制度についてそんなにたくさん知らないのかもしれないですが、知っていても知らなかったとしても、いろいろな聞き合い、教え合う関係というのが構築できるのではないかと思います。

これこそが日吉の学習相談アワー、学部2、3年生が相談員の中心になっているものの中での半学半教の場づくり、半学半教の関係づくりと言えるのではないかなと思います。

【教職員と学生との連携】

とは言え、学生が相談の中心だというところで、やはりどうしても心配というのはあると思います。知識や経験の不足を欠点と見ないといっても、やはり不安が残ると思います。そこで教養研究センターの先生方、またはメディアセンターのスタッフの方々との協力体制が大きな力になっています。

特に教養研究センターの先生方には、学習相談員の人選を担っていただいていますし、またメディアセンターのスタッフの方は、先ほど模擬相談の光景にもありましたけれども、相談業務をサポートしていただいています。知らないことをすぐに聞けるような位置にあるというのも日吉の特徴だと思います。

【自主展示企画・公開講座】

最後に相談の成果の還元です。まず相談内容に見る学生のつまずきを分析して企画を行っています。先ほど紹介したように、学習相談メモを取って、こんなつまずきがどうやら多そうだというように、データを集めていきます。それをもとにして、展示企画を行ってきました。

図 1-6　企画展示の様子

日吉図書館の1階、正面入り口から入ったところすぐの部分に、図 1-6 のように展示のスペースを用意しています。ここで正しいレポートの作成術とスケジューリング、考えるためのノートテイキングの方法などについての、企画展示を行ってきました。また、先ほどの模擬相談の実演を行ってくれた松下君が講師となって、レポートの書き方講座というのを開催しました。30 名の定員で行ったところ、両日ともに満席となりました。皆さんだいぶ集中して聞いていたので、つまずきどころを分かった上での説明ができていたのではないかと思います。

【日吉学習相談アワーの「半学半教」】

さて、ではまとめに入っていきます。日吉学習相談アワーの半学半教ということで、学び合い教え合う関係の構築というのがまず1つ挙げられます。これは相談者と学習相談員の関係もありますし、学習相談員と教職員、先ほどのレファレンスの方との連携のような、そういった関係もあります。また理想的には、相談者と、そして相談に来ない学生の関係ということも構築できていったらいいなと思っています。例えば展示企画を見て、「ああ、この失敗例、わかるわ」「ああ、そうだよね」と友達とつぶやいていた学生がいましたが、こういったレポートの失敗例というもの、つまずきを共有してくれる場というのが、あまり今までなかったかなと思っています。そういったものをつくっていくことによって、半学半教の場というのがつくれるのではないかと思っています。つまずきを一般化して、独りで悩む学生の力にしていくということですね。

【学習相談アワーの課題と今後】

最後に課題と今後について、まとめてみました。次の2点が挙げられています。

＊質的向上、量的拡大
＊相談員の経験の継承・相談員相互の関係づくり

一つは質的向上、量的拡大が必要だということ。例えば広報の問題です。どう周知していくのかという問題、あるいは相談者が少ない期間というのがどうしても出てきます。そういった時間があまりに長くなり、それで放置されてしまうと、相談員のやる気がなくなってしまうこともあります。その部分をどうしようかという課題も残されています。

それから、相談員の経験の継承や相談員相互の関係づくりというのが挙げられます。連絡帳ですとかメーリングリストを作って相談員相互の関係をつくっていこうとしていますが、日吉の学習相談アワーを担当している学習相談員の多くが三田キャンパス所属です。ですから、日吉キャンパスで実際に会っての関係づくりというのが難しい。今後は三田キャンパスでのミーティングを行っていくということが考えられていますけれども、経験をどう共有するか、継承するか、関係づくりをどう行っていくのかということが課題としてあります。

最後に、他の取り組みとの連携、あるいは大学教育における位置付けの検討というものが必要だろうなと思っています。本日のSFCや、それから矢上の取り組みとの連携ももちろんそうですし、あるいは、教養研究センター以外の先生方との協力というのも必要になってくるだろうと思います。どうしてもレポートに関する相談を受けるという性格上、先生方との連携を取っていかないと、こういうことをやっているとは知らなかったということを言われても困りますので、そのあたりも広報の充実というところも含めて、今後検討していく必要があるのではないかなと思います。

矢上キャンパス：S-Circle

伊藤　ただ今ご紹介いただきました、矢上キャンパスのS-Circleです。私たちからは、学生スタッフの伊藤とアブドゥルと原と荻野の5名で報告いたします。よろしくお願いします。

【理工学部の学生生活】

まずS-Circleについてお話しする前に、私たちが利用者の対象としている理工学部生と理工学研究科の学生の学生生活について、簡単にご説明いたします。理工学部生は、1、2年は日吉キャンパスに所属し、3年生から私たちの活動拠点である矢上キャンパスに来ます。また1年生から3年生は学問や学科別の講義がメインとなりますが、4年生以降は研究室に配属になり、そこでの研究活動がメインとなります。学部1年のときには学科分け、学部3年のときには研究室分けといった進路の意思決定をするタイミングがあります。

こういう学生生活の中で、よく抱く不安として、1年生のときの必修科目が多くて試験が不安、また、学科分けのときにはどの学科に進めばいいのか分からない、3年生以降で矢上キャンパスに来てからはその講義以外で居場所がない、研究室分けのときにはどの研究室を希望したらいいのか分からない、就職や進学の意思決定であったり、ほかの学科との交流が少ない、また研究室に配属になってからは研究室以外の活動場所が少ないといった不安があります。

これらの不安は、理工学部生は誰でも経験する悩みであるため、同じ経験をしてきた先輩ならある程度のアドバイスが可能であると考えられます。また交流の場所については、ほかの学科やほかの研究室と交流できる場所を矢上キャンパスにつくる必要があるのではないかなということが考えられます。

【S-Circleの概要】

次にS-Circleについてご説明します。まず私たちが活動している場所、矢上キャンパスをご案内します。階段を上がって創想館の右手の自動ドアを通った先が理工学メディアセンターで、私たちはここで活動しています（図

2-1)。S-Circle のテーマは「塾生の塾生による塾生のためのコミュニケーションスペースをメディアセンターにつくる」ということです。2010 年度からこれまでの 3 年間にわたっては、慶應義塾の未来先導基金からの助成を受けて、活動をしてきました。

主に理工学部生の実体験に基づいたアドバイスや学習支援、また学生同士や、学生や大学間の交流の場所を提供するという 2 つの軸で活動をしています。ちなみに、図 2-2 は私たちの団体のロゴなのですが、丸と S の文字があって、丸は心理学のコンフォートゾーン、居心地のいい人間関係の空間を、S が学生を表していて、居心地のいい人間関係だけじゃなくて、そこから一歩出て、未知のものに挑戦していく、そのための手助けを私たちでやっていきたいという願いを込めて、このロゴを考えました。

S-Circle の業務の内容ですが、大きく分けて相談業務と企画業務の 2 つがあります。相談業務では、理工学部生向けの学生生活のアドバイスや学習支援、企画業務ではメディアセンターを学生の交流の場所とするためのイベントや展示の企画を行っており、主に重きを置いているのが相談業務となっています。

学生スタッフは理工学部の全 11 学科から満遍なく公募で集められた 22 名で構成されています。学部 4 年生以上が所属していて、メインが修士 1、2 年の学生です。各学生がこのような班に各自、所属していて、活動においては、随時、理工学メディアスタッフの方と協力しながら活動しています。(図 2-3)

次に S-Circle の簡単な活動スケジュールです。4 月に相談業務を開始する前に、事前に学生相談室のカウンセラーの方からレクチャーを受けます。相談業務開始と合わせて、その年にどういう企画を行うのかというのを学生で選定する企画コンペなども実施しています。春学期と秋学期の試験期間は特に勉学の相談が増えるため、相談体制の強化なども行っています。

【相談業務の概要】

野呂　私たちは理工学メディアセンターを入っていただいて、すぐ右手のコンサルテーションスペースで相談を受けております。メンバーは普段は名札を付けています。

図 2-1　相談窓口（コンサルテーションスペース）

図 2-2　S-Circle ロゴマーク

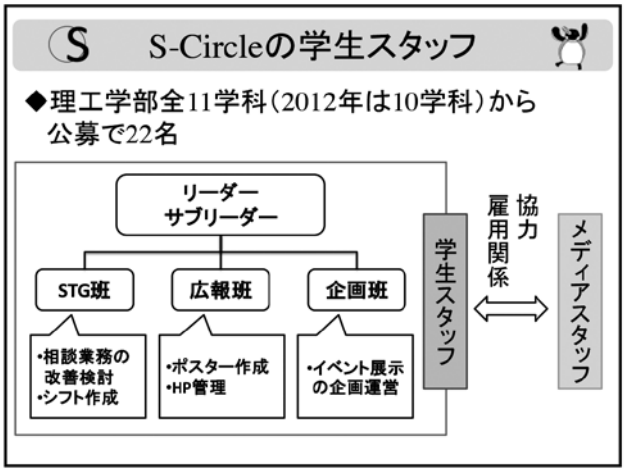


図 2-3　S-Circle の構成

この相談スペース（図 2-1）は、すごく日当たりがよく、天気のいい日は景色もよくて、相談するにはもってこいのスペースです。受付時間は月曜日から金曜日、12 時から 17 時まで。4 月の授業が始まる前から、テスト期間最終日まで行っております。常に学生スタッフが 1 人、待機している状態になっており、1 人当たり 20 分を目安に相談を受けています。予約していただくと、優先的に相談をすることができ、S-Circle のホームページのフォームから予約を受け付けています。

次にS-Circleの相談業務の特徴についてです。大きく3つあるのですが、1つ目は、S-Circleは相談内容は何でもありということで、勉学の相談のみならず、履修相談や理工学部に特有な研究室、学科分けの相談、あとは生活上の相談や、雑談も受け付けております。

2つ目は、身近な先輩のような存在ということで、同じ理工学部出身の学生が、自分たちの実体験に基づいて相談に対応しております。敷居を低くして、気軽に立ち寄って話せるような場所を目指しています。同じ理工学部出身なので、学科分けや研究室分けなど理工学部に特有な相談に乗ることができます。

3つ目が他部署との連携で、具体的なフォローは適切な部署に導いていくことにしております。例えば「単位は足りていますか」のような学事的な問い合わせに関しては、学生課学事担当に行ってもらうようにしていて、あとは生活上の深い悩み、家庭の事情等の深い悩みに関しては、専門のカウンセラーが滞在している学生相談室をご案内しております。

では次に、実際にS-Circleにどれだけの人が訪れているかです。これは相談業務の統計ですが、2010年にS-Circleが発足し、比較的、認知度が落ち着いてきた2年目の2011年、2012年には、年間300件以上の相談が寄せられています（図2-4）。

年度	相談 受付件数	受付人数
2010	190件	209人
2011	316件	343人
2012	305件	336人

図2-4　相談件数の推移

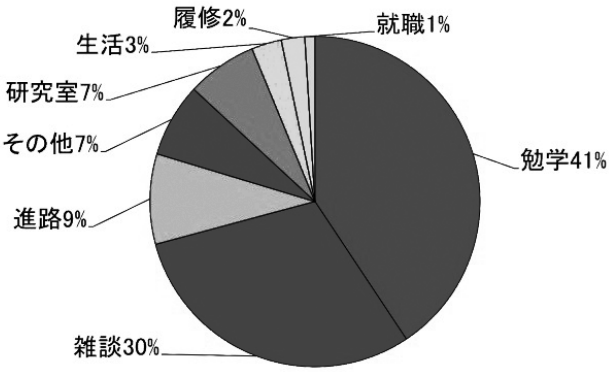


図2-5　相談内容内訳（2012年度）

では次に、どのような相談が寄せられているのかといいますと、勉学が一番多く、次に多いのが雑談で、それから進路、研究室と続きます。勉学のみならず、幅広く質問を受け付けているということが、このグラフ（図2-5）から読み取れます。

【相談内容の例（履修）】

次にどのような質問があって、私たちがどのように対応しているかです。はじめに、履修相談に関する例なのですが、「この講義はどのような内容ですか」とか、「楽な講義はありませんか」といった質問が寄せられます。このときに注意しておきたいのは、決して勉学をしないことを奨励しないということです。シラバス等の客観的な事実と、自分たちが履修した経験からのアドバイスを心掛けています。相談スペースにはシラバスが常に置いてあるので、それを参照しながらアドバイスします。

具体的な対応例ですけれども、やっぱりまずは「楽な講義はありませんか」と聞かれてしまうんです（笑）。そのときに、例えば「この授業は出席していれば単位が取れるから大丈夫だよ」みたいな形ではなく、「この授業は主な評価が出席で、数学を専攻している人が多く履修しているみたいだよ」というように、シラバスを参照して客観的な事実を伝えてあげることと、それから周囲の雰囲気や自分が履修したことによる経験からのアドバイスを心掛けています。

【相談内容の例（勉学）】

次に、勉学に関する相談です。これは本当に特徴的なのですが、理系の専門的な内容がたいへん多いです。「微分方程式の解き方を教えてください」とか、「立体有機化学の問題を教えてください」のような専門的な質問が寄せられます。

このときに注意している点ですけれども、答えは必ずしも与えずに、一緒に考えるということを心掛けています。答えだけじゃなくて、その導出方法から教えてあげること、分からない問題は一緒に考えるということを心掛けています。

具体的には、例えば「数学のこの問題が分かりません」と聞かれたときに、相談員が自分で計算してしまって、「この答えは○○だよ」と答えを教えてしまうのではなくて、例えば「グリーンの定理って習った？　この場合はこう考えると、こうなるよ」と、導出方法から教えてあげること。それから一緒に勉強してあげることで、相談者が自力で問題を解けるようになることを目標に、相談に当たっております。

また、テスト期間直前になると、理工学部の 1 年生や 2 年生などが急増します。これは現在、日吉のチュートリアルアワーがテスト期間中は行われていないこともありまして、テストの当日や前日に慌てて駆け込んでくるような学生も多く、テスト前の駆け込み寺になっています。通常相談員は 1 人ですが、「試験対策キャンペーン」としてこの時期は 2 人体制にしています。この時期に合わせて、広報活動も強化します。

【相談内容の例（研究室・学科）】

次は理工学部特有な研究室、学科分けに関する質問です。このときに注意しているのが、解を押し付けないことです。基本的な情報やアドバイスを与えてあげて、最後は相談者に解を出させるように注意しております。学科分けや研究室分けの時期に合わせて、広報活動も強化します。

「どのような研究室に行けばいいか分からない」といった質問が寄せられたときに、例えば「こっちの研究室よりも、自分の研究室がすごく居心地がいいから自分の研究室がいいよ」と、自分の意見を押し付けることではなく、「○○研究室ならあなたの興味に近い、コアタイムが毎日あって、学会発表も積極的に行っている」と、相手との会話の中で相手の興味を引き出してあげて、それを具体化すること、研究室選びにおけるポイントをアドバイスしております。相談スペースにパソコンがありますので、ホームページがあれば、その研究室のホームページを見て、一緒に相談者と話しながら、研究室分けの相談に乗っています。

【相談内容の例（生活・雑談）】

最後に、生活に関する相談や雑談です。例えば「プリンターの使い方が分からない」と留学生からの相談がくるように、S-Circle の相談スペースは立ち寄りやすいような場所になっています。このときに注意しているのが、聞く姿勢を心掛けることです。能動的に聞く姿勢を見せて、相談者からの話を聞き出すことを心掛けています。それから共感できるような話をします。これはキックオフミーティングの際に、学生相談室のカウンセラーからガイダンスを受けていることが生きていると思います。

具体的には「実験がうまくいかなくて大変」など、これも理工学部特有の悩みだとは思いますけれども、卒論間際とかだと、こういった形で訪れる人もいます。そのときに気を付けているのは、雑談と言っても自分の話を中心にしてしまうということではなく、「大変だよね、自分も卒論間際の実験は大変だった」と、能動的に相手の話を聞いてあげること、また共感するエピソードがあれば、それを話してあげること、このようなことを通して、相談者のストレスを解消してあげることを目指しています。

【相談業務の課題とその解決に向けて】

相談業務には、いくつか課題があります。例えば情報が専門なのに、化学の高度な質問が来てしまったときや、相談内容が重過ぎるようなときには、無理をせずに、適切なところへ回すことを心掛けております。

学問的な質問であれば、情報が専門の相談員なのに化学の質問が来てしまった場合に、化学科や応用化学科のほかのスタッフのことを紹介して、予約を促しております。あとはチュートリアルアワーがやっていれば、チュートリアルアワーの方を紹介して、そちらの方に行くように促しております。

重い内容の相談ということで、家庭の事情などの重い内容の質問、私たちじゃちょっと責任が取れないような質問に関しては、専門のカウンセラーがいる学生相談室を紹介しております。ここで S-Circle の特徴である他部

署との連携というのが生きてきていると思います。

次に、相談業務と並んで、S-Circle の活動の柱である企画業務についての説明をしていきたいと思います。

【企画業務の概要】

アブドゥル　図 2-6 が企画を行うスペースです。S-Circle は相談業務のほかにもさまざまな企画を立てて活動しています。この企画業務の主な目的としては、他学科、他研究室の学生との交流の場をつくること、そして幅広い専門外の知識を得る場をつくることです。

この企画業務は S-Circle の知名度の向上やメディアセンターの活性化にもつながっていますし、学生スタッフ同士の交流も目的としており、これまでにさまざまな企画を立ててきました。ただし、どのような企画でも行えるのではなくて、企画ガイドラインがあり、学生スタッフがこのガイドラインに沿ったイベントや展示を考え、企画コンペで企画を立案します。コンペティションを通して企画が選定されて、選定された企画を学生スタッフ全員の力で成功させます。このガイドラインに合格した企画であれば、コンペへ立案することが可能ですので、企画発想の自由度は高いと思います。（図 2-7）

【イベント企画①：サイエンスカフェ】

企画業務には、イベント企画と展示企画があります。まずはイベント企画の 1 つ「サイエンスカフェ」をご紹介します。この「サイエンスカフェ」のコンセプトは、専門以外の研究分野に学生が気軽に触れる機会を提供することです。S-Circle がお菓子や飲み物などを用意して、カフェのような雰囲気で教授の講義を聴くことができ、双方向にコミュニケーションが取れます。サイエンスカフェが学生と教員の間の交流、そして専門外の知識の提供の場になるのではないかと思っています。

【イベント企画②：矢上サロン】

「矢上サロン」というのは、矢上キャンパスには留学生が多く通っていますので、留学生と仲良くなろう、ほかの国の文化を知ろうという意図で立てられた企画です。2012 年 10 月に行われた矢上サロンでは、6 カ国の留学生が参加しました。とても好評で、矢上サロンによって、日本人学生と留学生の間の交流ができているのではないかと思っています。留学生にとってはもちろん、日本人学生にとって、異文化への理解が深められるのではないかと思います。

図 2-6　イベント・展示の様子

慶應義塾，理工学部・理工学研究科ならびに理工学メディアセンターの品位を汚さない企画であること
特定の人物，研究室を批判する内容でないこと
著作権法その他の各種法令を順守すること
勉強せずに楽に卒業することを推奨する内容でないこと
企画内容はS-Circleメンバーの主観に基づくものではなく、客観的な情報を含むこと
S-Circleの企画コンセプト（人と人のつながりを作る／知識の共有の場と機会を設ける）を意識したものであること

図 2-7　企画ガイドライン

【展示企画①：素晴らしき本世界への誘い】

原　展示企画は、矢上キャンパスメディアセンターの通路や壁、柱などのスペースで行っています。2012 年度行われた企画の一つに「素晴らしき本世界への誘い」があります。理工学メディアセンターは専門書がほとんど

ですが、創想ライブラリーという一般書のコーナーがあり、理系学生の視点を取り入れた選書を行うことによって、より教養を深めてほしいというコンセプトで行いました。一般書を学生スタッフが全部で 32 冊選定いたしまして、オリジナリティーあふれる手作りのポップを付けて、本棚に展示しました。(図 2-8)

企画で展示した本は多く貸出され、学生の視点から選んだ本で、教養、知識の提供を行うことができたと思います。

図 2-8　展示企画「素晴らしき本世界への誘い」

【展示企画②：矢上での生活】

「矢上での生活」という企画は、理工学部生が他学科の生活が分からない、また高校生は理系の生活が分からないといったことから、理工学部生のさまざまな学生生活の実態を紹介したいというコンセプトで行われました。全学生スタッフの生活実態を、1 人 1 枚パネルに自由にレイアウトして赤裸々につづったものを公開しました。これはオープンキャンパスで展示を行い、多くの高校生や保護者の方にご覧いただきました。実際に高校生からは、特に慶應の理系女子の情報が得られてよかったといったご意見をいただき、高校生との交流やリアルな学生生活の紹介を行うことができました。(図 2-9)

図 2-9　展示企画「矢上での生活」

この他にも、さまざまな展示の企画を行いまして、多くの反響をいただいております。

【学生スタッフのメリット】

荻野　最後は活動全般についてご説明させていただきます。まず学生スタッフの成長についてです。S-Circle は、相談しに来る人やイベント企画に参加する方以外にも、僕ら学生スタッフにとっても意味のある活動となっています。学生スタッフのメリットですが、まず他学科の知り合いができること、それから研究室以外の交流の場ができることがあります。理工学部は 2 年生からは学科ごとでしか授業がなかったり、4 年生になると研究室といった狭いコミュニティになってしまったりします。そのため、今日一緒に発表している他の学科の人や、留学生のアブドゥル君などと交流できることは、学生スタッフにとってメリットとなっています。

また、相談業務は、半学半教という言葉もありますが、教えることによって知識の再確認ができます。また他者への貢献ということから、充実感につながっているのではないのかなと考えています。

最後に、S-Circle は、企画コンペから準備、それから展示、イベントの実施まで学生が中心となって行います。そのため S-Circle の学生は、自発的な活動による企画力、運営力の向上、それから達成感が得られています。

また、各企画は分かれていますが、学生スタッフ同士で協力して何回もミーティングをして、企画というものを行っています。そのために学生スタッフ同士の結束力の向上にもつながっています。さらにサイエンスカフェですと、講演していただく先生、それから矢上サロンですと、留学生などと協力をして 1 つの企画を立ち上げるので、そういった教員やほかの学生とのつながりというものも、S-Circle の特徴です。

実際に学生スタッフの声を聞いてみますと、イベントなどで多くの貴重な経験ができたとか、あと他の学科の学生と一緒に活動できて楽しかった、研究では味わえないチームとしての達成感を味わえたとか、とても有意義

な活動だったといった意見が挙っています。

【活動における課題】

これまでが学生スタッフにとってのメリットだったのですが、活動における課題についても、少しご紹介させていただきたいと思います。多く分けて 3 つ、活動の認知度の低さと相談者が抱える抵抗、それからスタッフ間のノウハウの共有という課題があります。

まず 1 つ目の活動の認知度の低さなのですが、「S-Circle って何､サークルなの？」という声があります。そのために､「S-Circle というものはこういうものですよ」というのを、広報活動の強化をして訴え掛けています。また相談者が抱える抵抗として､例えば「今は相談をやっているの？」とか､「相談員はどんな人なの？」といった悩みや疑問というものがあります。そのため相談体制の改善を行うように心掛けています。またスタッフ間のノウハウの共有ですが、相談業務中に相談スペースにいるのは 1 人とか 2 人なので、ほかのメンバーが何をやっているのかというのがなかなか共有できないといった課題があります。

①広報活動の強化

広報活動の強化として、S-Circle の学生スタッフはいくつかの班に分かれていまして、広報班もあります。この広報班を中心として広報活動を強化しているのですが、例えば S-Circle のホームページを作成したり、ポスターを作製したり、「Twitter」アカウント作って、相談業務中にメンバー全員が更新するようにしています。例えば「最近、プラ板のアクセサリーを作るのにはまっています」とか、そういった雑談的な内容から、「S-Circle では息抜きや雑談も受け付けています、卒論、修論に疲れたらいらしてください」といった広報的なこともつぶやいています。

あとは、企画業務による宣伝、サイエンスカフェですとか、矢上サロンといったイベント企画の最後に、いつどこで誰が何をしているのかといったことを宣伝しています。また、メディアセンターの貸出カウンターに S-Circle のしおりを設置し、広報活動を行っています。これが S-Circle のホームページですが、こんな感じで、

図 2-10　S-Circle ウェブサイト

ニュースとか「Twitter」とかといったものがホームページに載っています。(図 2-10)

②相談体制の改善

相談体制の改善についてですが、STG 班というものがあります。これは当て字ですが、「Soudan Thinking Group」と言って、相談を考えるグループという、名前そのままの班です。

この STG 班は何をやっているかといいますと、入りやすい雰囲気づくりのために、相談スペースの配置を検討したり、作業に没頭しないで、相談スペースに入ってくる相談者にちゃんと注意を向けるようにしたり、いつでも答えられる雰囲気をつくってくださいといった注意をしています。

それから、S-Circle には相談員プロフィールと相談シフトがあり、これらを作成しているのも STG 班です。相談員プロフィールはホームページと、あと相談スペースのホワイトボードに掲示するようにしています。それから理工学部はいろいろな学科の方がいるのですが、どういう学科の相談員がいついるかが分かる相談シフトというものも公開しています。プロフィールや相談シフトを公開することによって、利用者が事前に話をしたい相談員を選択できるようになっています。

相談員のプロフィールはホームページにも掲示しており、名前と学年と出身学科、それから研究室というものを情報として載せていまして、あと more として、一言書いてもらうようにしています。こんな感じで、気軽に

どういう人が相談スペースにいるのかといったことをちゃんと見てもらうようにしています。

③情報共有の取り組み

情報共有については、相談スペースにはパソコンがあり、Excel でその日の自分が受けた相談内容を記録するファイルを作っています。この Excel ファイルによって、2 回目以降の相談者へのスムーズな対応をはかると同時に、相談傾向の分析をおこなっています。

スタッフ間の情報のギャップを埋めるために、S-Circle では「S-Circle スタッフ Wiki」というものを作っています。Wiki というのは、誰でも編集可能なウェブ上の辞書、マニュアルで、ユーザー名とパスワードによって、一般には公開されないクローズドなものを作っています。この「S-Circle スタッフ Wiki」によって情報の蓄積を行っていまして、メンバー間の情報のギャップを埋めるといったことや、あと次年度以降へのノウハウの引き継ぎ、他のメンバーの現在の活動状況を把握することを可能にしています。

実際の「S-Circle スタッフ Wiki」の画像が図 2-11 です。今年のキャッチフレーズとか、重要事項、今後の日程を「S-Circle スタッフ Wiki」で共有しています。あとは広報班の議事録、報告事項というものがありまして、例えばポスター時期が決定しましたよとか、ポスターの具体的な内容はこうしますよといったことが Wiki によって共有されるような仕組みになっています。

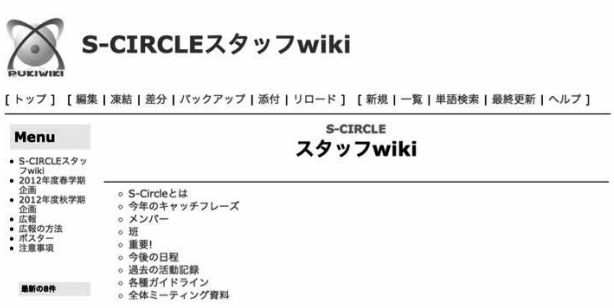


図 2-11　S-Circle スタッフ Wiki

【今後の取り組み】

ここまで S-Circle 活動全体についてご説明させていただきましたが、今後の取り組みについて、お話しさせていただきたいと思います。S-Circle ですが、今年度から活動が大きく変わるのではないかと考えています。これまで、未来先導基金の助成によって、S-Circle は運営されてきました。その助成によって、いろいろな企画や幅広いイベントを行ってきたのですが、こちらの助成が今年度までとなっています。しかし S-Circle のスタッフとしては、ぜひ活動を継続したいと思っておりまして、企画業務は縮小されますが、大事な部分は残し、それから S-Circle のスタッフだけでは力足らずの部分があると思うので、メディアセンターのスタッフの方ですとか教職員との連帯を心掛けて、活動を進めていきたいと思っています。

SFC キャンパス：ライティング & リサーチコンサルタント（WRC）

天笠　こんにちは。ライティング & リサーチコンサルタントの天笠と申します。よろしくお願いいたします。

日吉、矢上に比べて若干フレッシュさがないと思うんですけれども、実際、私たち 3 人のうち、2 人が学生ではないんです。ポストドクターの人間になりますので、ほかのキャンパスとはそういった意味で少し毛色が違う部分もあると思います。

【コンサルタント】

私たちコンサルタントは、先ほども申した通り、ポストドクターの研究員が 2 名と、後期博士課程の学生が 1 名の計 3 名です。少し無理やりですけれども、文系、理系、プラクティカルな、よりアカデミックな研究分野ということで分けるとこんなように配置されるかと思っております（図 3-1）。多様な研究に、できるだけ多様に配置できるように人材も集めております。

簡単に我々のことをご紹介しておきますと、まず基礎をつくってくれた笠井さんという、今、龍谷大学の専任講師をされている方がいます。この方はライフストーリー、ライフヒストリーの調査ですとか、あとアジアの困窮問題、国際系の研究をされていた方です。

続きまして私、天笠です。もともと地域社会、メディア論ですとか、社会調査を専門とする人間です。藤沢市で政策研究員という仕事をしていたり、今は実践女子大学で非常勤講師として教えております。

続きまして紅一点、内藤さんです。内藤さんはイギリスと北京に留学経験をお持ちで、国際経験が豊かで、現在は外務省の専門分析員としても働かれております。専攻は、先ほどの笠井さんを引き継ぐような形で、国際系ということで、地域研究ですとか政治学、比較体制論を専攻されています。

最後に直江さんです。直江さんは SFC の申し子ということで、情報系、情報セキュリティー論ですとか機械学習の研究をされております。（図 3-2）

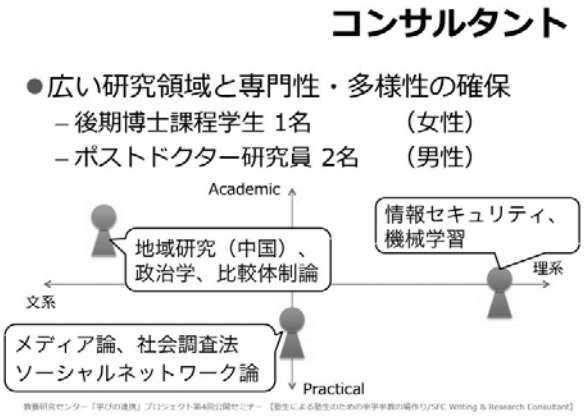


図 3-1　コンサルタントの研究分野

図 3-2　WRC のメンバー

【活動のコンセプト】

活動のコンセプトは、基本的には冒頭に日吉の皆さんで発表していただいたものと変わらないかなと思います。半学半教の精神に則って、比較的、近い立場から、学生たちの論文ですとかレポートの執筆のサポートをしていきたいと思います。SFC でも設立当初から、半学半教の精神は重要と考えているのですが、制度としてなかなか担保できている部分が少ないと思いますので、それを何とかできたらいいなというのが問題意識であり、目標です。

そこで、私たち WRC の活動があります。先ほどからかなりたくさん出ている視点ではありますが、学生に近い立場から、と言っても我々は少し離れているのですが、常設の相談機関があったらいいなということです。また、SFC 特有の問題として、かなり多岐にわたる研究分野に対応しなければいけないという問題があります。できればそういう多岐にわたる相談分野に対応できるような体制でやっていきたいなというところもコンセプトとして持っています。その結果、生まれたものが、私たち「ライティング & リサーチコンサルタント」ということになります。

【設立の経緯と実績】

次にどのように設立されていったのかをご紹介したいと思います（図 3-3）。まず 2010 年の 11 月から 2011 年の 3 月が準備期間のファーストステージとして位置付けられまして、湘南藤沢メディアセンターで、やはりピア・サポートの仕組みがメディアセンター内に必要だという議論があり、それに向けて準備組織をつくっていくことになりました。

当時、博士課程の学生だった立ち上げメンバーの笠井さんがこのグループに立ち上げの段階から参加して、学生の立場から意見を出していって、設立にかかわっています。そのなかで、研究を指導していく上で、教授の方々との関係が重要だという意識を持っておりまして、当初からアンケートを取る形で、教授陣にどのようなご要望ですとかご意見があるのかといったようなこともちゃんと聞きながら、準備を行いました。

アンケートを取った結果、3 割超の教員の方にご回答

図 3-3　WRC 設立の経緯

図 3-4　コンサルタントのスケジュール

をいただき、やはりこういうような組織は必要だろうということで、より具体的な方向性に動きだしています。

その後、2011 年の 4 月から 2011 年 6 月、3 カ月間、この時点で現在のメンバーでもある、私と直江が新たに加わりまして、実際にコンサルティングを行っていきましょうという体制を整えています。さらに、教員の方々へのアンケートを行いまして、その中で既存のライティングに関係する授業との関係はどうなるかですとか、いろいろご意見もいただき、そういった教員のご意見も尊重しつつ準備を進めて、試用期間に入っていきます。

試用期間が 2011 年の 7 月 15 日から 2012 年の 1 月 31 日です。基本的に 3 人のシフト制で回していますので、毎日この時間というわけではありませんが、だいたい毎週何曜日にこれぐらいの時間で入れるような体制をできるだけ心掛けていたということです（図 3-4）。

春学期は 6 日間しか行いませんでしたが、20 人の方に相談しに来ていただいて、かなり盛況を呈しました。秋学期も 53 人と、かなりの人数が来ております。このときにホームページも開設して、だんだん体制を整えてきたということですね。

そして本年度になりまして、4 月から本運用が始まっております。設立当初からこの活動を支えてくれた笠井さんが、龍谷大学に専任講師として決まったということで、その時点で、内藤さんにバトンタッチをして、この 3 人で今日まで進めてまいりました。

まず受付時間の変更ということで、夜は人は来ますが、こちらのコンサルタントの方の対応が大変だとか、いろいろ意見がありまして、受付時間を 21 時から 19 時までに変更しております。さらにホームページからオンラインで予約が可能になるなど、体制自体も整えています。その結果、実はこの前の学期よりも相談人数は減ってしまったんですけれども、長くやっていくような体制を整えたという形です。

続いて秋学期、本年度の後半ですね。実は急激に相談人数が増えております。これは後ほど説明しますが、実は直江さんに出張講義というのに出てもらいまして、出張講義から人が来てくれたという流れになっています。また、リピーターが多くなったなという感想を持っておりまして、まだまだ拡大する余地、頑張っていく余地はありますが、だいぶ認知が広がってきて、定着してきたかなというのが率直な印象です。（図 3-5）

図 3-5　本運用からこれまで

図 3-6　コンサルティングの様子

【コンサルティングの様子】

コンサルティングの風景ですが、図 3-6 のような形で、だいぶラフに行っています。この中に、湘南藤沢メディアセンターへいらっしゃったことがある方がいるか分かりませんが、2 階のイベントスペースというところが、常にオープンスペースになっていまして、イベントをやっていないときに主に開設して、ここで対応をしています。看板も設置して、人を集めています。

相談内容は、論文の修辞ですとか引用、参考文献の記法ですとか資料検索法、情報収集法などいろいろ対応していますが、我々の特徴としては、いろいろな教員との関係性も考えながら、コミュニケーションを取りながら、少しだけ研究の一部に踏み込んだ対応を行っているというのが特徴かなと思います。

【コンサルティング上の工夫】

内容以外のコンサルティング上の工夫ですけれども、まずシフトを館内に張り出して（図 3-4）、またホームページ上にシフトを張り出して（図 3-7）、リピーターの方に向けて、個人にひも付いた形で、きっちりと指導ができ

るような形を考えています。ホームページを用意していて、図 3-7 のようにカレンダーの中に誰が何時まで対応という情報が出ております。

さらに、先ほども少し申しましたが、ウェブ上にフォームを用意して、ここから予約ができるようになっております。さらに問診票、これはどの地区の方もいろいろ工夫されているみたいですけれども、WRC でも問診票を用意していて、それに記入していただいて、利用者情報の収集に努めております。さらにそれを Excel に入力し、我々も Wiki のようなものを用意しておりまして、その中で Excel を共有して、利用者情報の共有を図っている形です。やはり人をまたいでコンサルティングすることがありますので、引き継ぎをうまくやれるようにということを考えています。

【広報の工夫】

一時期、利用者数が減ってしまったということもあり、広報にも力を入れるようにしておりまして、先ほどお見せしたホームページの設置ですとか、あと「Twitter」を活用してつぶやいております。実は「Twitter」は先ほど他キャンパスの方のお話を聞きながら呟きました（笑）。少しコンサルタントの性格が出るようなツイートをして、親しみを持っていただけるように工夫しています。

【利用の状況】

次に、利用状況をより詳しく見ていきます。少しデータが古いので、利用者数が減ってしまっているところでデータが終わっていますが、実はこの後、秋学期に入ってから、先ほど申した通り少しずつ利用者数が伸びておりまして、10 月が 29 人、11 月が 33 人、12 月が 24 人、1 月が 21 人となっております。初回利用者数だけでカウントすると、10 月が 20 人、11 月が 28 人、12 月が 17 人、1 月が 5 人ということで、1 月はリピーターが大半を占めていたということがお分かりいただけるかなと思います。認知度が広がっている傾向が見えるということですね。（図 3-8）

続きまして、時間帯別の利用者数です。これは単純にお昼どきと晩ご飯どきが減っている、人の生理現象には逆らえないかなという形ですね。（図 3-9）

図 3-7　コンサルタントの予定（ホームページ）

利用の状況（『MediaNet』 no.19より）

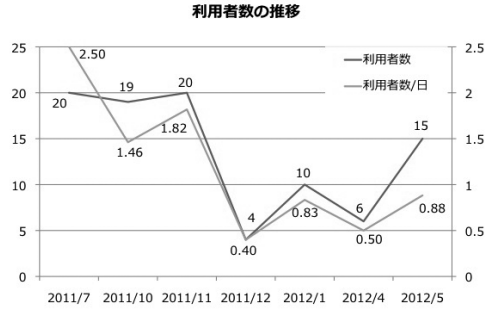


図 3-8　利用者数の推移

利用の状況（『MediaNet』 no.19より）

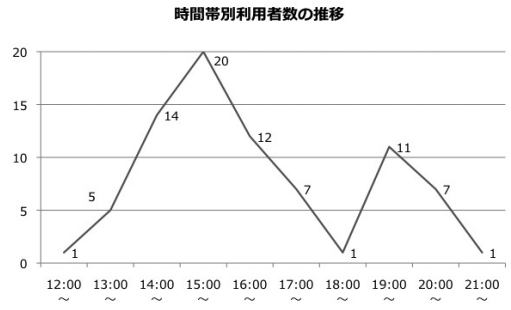


図 3-9　時間帯別利用者数の推移

さらに利用学部と相談分野になりますが、利用学部については、実は私たちの特徴として、相談員は博士課程以上ということで取り組んでおりますので、修士の学生が利用することも比較的あります。実際、2 割弱程度、修士の学生も利用があります。さらに相談分野は、政治ですとか経済、政策といったような人文系の相談が多い

という特徴があります。SFC なので、情報の相談が多いかと思いきやなんですけれども、情報系の研究室は、比較的、体制がしっかりしているといいますか、教員がいて、博士の方がいて、修士の方がいるという構造がしっかりしていることもあり、こういった社会ですとか、比較的テーマが広くなりがちな研究分野の相談が多いのかなと我々は考えております。（図 3-10）

さらに利用の状況ですけれども、相談の目的の割合としては、卒業制作、研究会期末論文ということで、SFC ではゼミのことを研究会と呼んでいるんですけれども、そのゼミ、研究会関連が約半数強となります。それで授業が残り 20%、2 割程度、その他が 2 割程度ということになります。（図 3-11）

相談のテーマですけれども、当初、我々は「ライティングコンサルタント」と呼んでいましたのを、「ライティング＆リサーチコンサルタント」と改めました。それは実は相談内容にも 1 つ理由があります。論文の構成の部分の相談が多かったのです。文章の書き方ですとか情報の集め方、参考文献の書き方といったようなテクニカルな質問が当初、多いかなと思いまして、ライティングの部分が強いかなと考えていましたけれども、やっていくうちに、どうしてもそれだけでは収まらないところが出てきてしまいました。そこで、ライティング＆リサーチコンサルタントに改名したというのでもあります。

またこれは冗談半分ですけれども、ライティングコンサルタントと言ってしまうと、普通に略すと WC になってしまって、トイレになってしまうので、もともとそれが嫌なので、WRC と言っていましたが、偶然、その R がリサーチに収まりまして、きれいにちゃんと名は実を表すようになったかなと思っております（笑）。

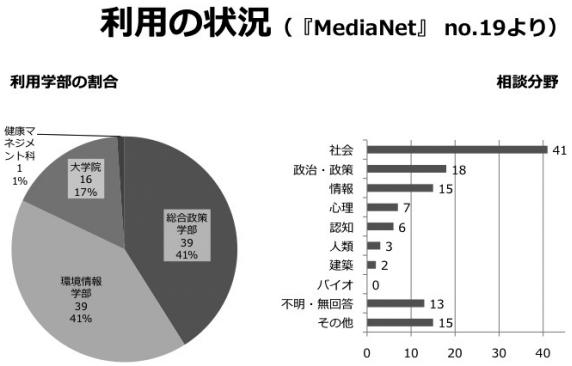


図 3-10　利用学部の割合と相談分野

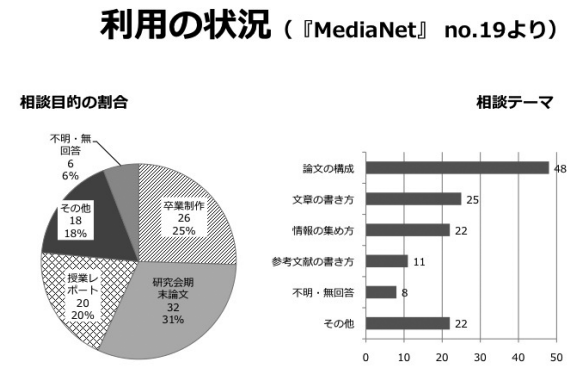


図 3-11　相談目的と相談テーマ

【相談内容の例】

実際に、どんな相談内容があったかというのも、ご紹介したいと思います。図 3-1 や図 3-2 の私たちコンサルタントの研究分野からも SFC の研究テーマの広さというのはお分かりいただけるかなとも思います。

すごくオーソドックスな、「1 年生で初めてレポートが出たが、何をどう書いていいか分からない」、「どう書いたら評価されるか心配だ」という質問もあったりしますが、そういう場合は、レポートの章立てですとか、そういったベーシックな指導をしますが、例えばそれがちょっと進んできますと、「短いレポートになるとよいけれども、長いレポートになると、最初と最後でつじつまが合わなくなり、何を書いていいかよく分からなくなってしまう」と。これもよくある話だと思います。こういうものをちゃんと章立てをして、あらかじめフレームを作っておくとつじつまが合って、論理立ったものができますよですとか、そういった指導もしています。

ただ SFC の難しいところは、手法もさまざまなわけですね。例えば「自ら作ったメディアの評価を行いたいが、どういった手法を用いればよいのか」という質問も来たりします。それに関しては、ある程度、専門性のあるスタッフがいるので、一通り調査手法の特徴とその応用範囲みたいなものを説明して、どれがいいですかねと、ちゃんと教員と相談をしてくださいといったような指導をしたり、あとはテーマの多様性というところで、例えば「児童虐待をした親の生命倫理観についての調査を行

いたい」という質問があったかと思えば、「ライトノベルを対象に研究を行いたいが、どうすればライトノベルを研究対象として扱ったらいいか、どうしましょう」という人、そうかと思えば、「ドイツと日本における書籍の需要、消費のされ方の比較研究をしようと思っている」とか、異種格闘技戦並みの多様性を持っているわけです。

ただし、こういうような多様性はありますが、基本的に研究をするときのフレームというのは変わらない部分がありますので、そういったフレームを意識して、ちゃんと指導教官、もしくは授業の担当者とコミュニケーションを取るようにという指導を心掛けるようにしております。

【今後の課題】

今後の課題としては、アンケートを継続的に実施できたらなと思っているのと、それから学生からのフィードバックをもうちょっと生かしたい。3つ目はかなり問題ですけれども、我々、基本的には博士課程以上ということを前提にしておりますので、人材の確保がなかなか難しいということですね。

あとは広報上の工夫ですね。ホームページですとかレポートの書き方なども充実できたらと思っております。イベントとかシンポジウムも開いて、なるべく広報に力を入れていけたらと思っております。

では、ここでコンサルタント3人のパネルディスカッションを行ってみたいと思います。

【WRC 相談員によるパネルディスカッション】

直江　直江と申します。よろしくお願いいたします。ここからはちょっと形式を変えまして、SFC らしい感じを醸し出していければと思っております。ちょっとフランクに雑談みたいな形で、我々の湘南藤沢ライティング＆リサーチコンサルタントの利用実態みたいなことの一端を皆さんに見ていただければと思っています。

まずは SFC ってわりと特殊だと思うんですけれども、もう少し、実際に窓口に来る利用者の傾向だったり学年だったり、相談内容みたいなことで話をしてもらいたいんですけれども、「これが来て大変だったな」とか、「これは会心のサポートができた」のような話はありますか。あるいは、どんな傾向、まずどういった内容が難しいかなというのでもいいと思います。

内藤　私はまだ経歴が短いので、あまりきちんとしたお答えはできないかもしれませんが、やっぱり難しいなと思ったのは、直前に来られる駆け込み寺の状態のとき。「もう1分1秒もありません、今日の23時59分に提出しなきゃいけなくて、まだどうしていいかが分からない」というときは、やっぱりすごく困りますが、取りあえず落ち着かせて話を聞きます。

やり始めて分かったことは、自分に教えられることって本当に多くはなくて、一番重要なのは聞いてあげること。今までもたくさん出ていたと思いますけど、じっくり時間をかけて聞いてあげて、彼らがいったいどういう頭の中で悩みがあるのかというのをひも解いていく作業が必要だなと思いました。

もう1つは、分からないところが分からないという状態の方ですよね。そのときには、できる限りサポートしてあげて、リピートをしてもらうようにしてもらう。また私だけではなくて、せっかく3人いるので、できるだけセカンドオピニオンを聞いてもらって、ここに来てどんどん研究のステップをしていってもらうという、スケジューリングをしてもらうような形にしてもらえるように努力はしていたということですね。

直江　幸い自分の専門外の質問があっても、実はそのほか2名でカバーできるということは、この2年間は多かったですよね。そういった意味では、専門がばらけていたというのが幸運に働いたかなと思っています。

あとは、教員との関連というところで何か気を付けていることありますか。先ほど天笠さんの方から説明がありましたが、我々はもともとライティングコンサルタントですね。要はテクニカルな修辞とか論文の書き方、構成、それから参考文献の書き方等々のテクニカルな部分を指導するというスタンスで始めましたが、やはりどうしてもそもそもの研究に対する姿勢ですとかというのにどうしても踏み込まざるを得ないという状況がありまして、先ほどご紹介したような、事前に教員にアンケートというのを取っています。

それで、誰々先生の研究室では、「ここからここまでは踏み込んでいいよと、でもここ以上は私たちの研究室で面倒を見たいので」といったさまざまなニーズがあるので、我々は相談員が来たら、問診票というのを提出していただきまして、所属がどこであるかを確認して、どこまで指導していいかというのを一応確認して、実際の指導に入るのですが、何かその辺でご苦労された点とか工夫したこととかありますか。

天笠　工夫というわけでもないんですけれども、SFCの特徴として、それほど専門積み上げ型ではないので、ある勉強をしていましたが、突然こっちの分野に興味を持って、このゼミに入ってみました、しかも2年生、ひょっとすると1年生から入りましたということ自体が多いんですね。そうすると、ほかのキャンパスの学生に比べて、当然、差はあるんですけれども、教員と学生との情報知識差というのが大きくなりやすいのかなという傾向があるかなと思います。そうすると学生がやっぱり教員に何かを相談するということも、場合によっては難しいケースが出てくると。

我々の役割としては、基本的に教育活動は教員の方々に行っていただくのが筋かなと思いますので、教員の方と相談をするまでの背中を押してあげるような情報の入れ方とか情報の与え方を意識するようにしています。基本的にはそこを外れないようにということを考えています。

直江　そうですね。今、ご紹介があったように、湘南藤沢キャンパスは、わりとより実学というかプラクティカルなことを、授業のレベルから、それからゼミ研究室で行っていることが多いので、意外と基礎が抜けていたりすることがあります。もともとのライティングという部分に関しては、その研究の基礎ができていて、あとは要するにアウトプットする方法だけが知りたいということを、想定していたのですが、実はその前の段階の方のサポートというのが今まで充実していなかった。あるいはSFCという独自の文化のせいなのかもしれませんけれども、あまり基礎を教えないというか、1年生でも研究室に入れてしまいますので、いきなり専門的な内容に入って、ふたを開けてみたらちょっとどうすればいいか分からない、分析手法も分からなければサーベイの方法も分からない、どういった分野、どういった文献をサーベイすればいいか分からないというところから入っていきますので、それはとてもSFCらしいかなと思いました。

では次に、大事なところで、ほかの地区と違って、専門的な内容が多いということもあったので、例えば国際学会発表のペーパーを用意するので英語のチェックをしてくれだとか、修士論文の最終発表を前にプレゼンテーション資料だとか、あるいは修士論文をぜひ……ということがあると思いますが、今までどう対応されてきたか、ぜひ紹介していただければと思います。

内藤　私は実は修士論文のプレゼンテーションを初期のメンバーである笠井さんにすごく相談していた側の人間で、相談している側の人間から言わせると、SFCの特徴ってすごく大きいものがあります。例えば修士論文の報告会をするときに、自分の専門外の先生も審査をします。そのときに、自分の専門でしか伝わらない単語を使っている場合が多いです。

そのときに、もっとよりフラットな段階で自分の研究を見て、チェックしてほしいということが自分自身もありましたので、そういう相談が来たときはすごく理解ができます。ですから、博士課程の人間として、より客観的な視点から、修士論文であったり、その報告を聞いたときに、ここは少し分かりにくいなというところがあった場合は指摘をしてあげて、より客観性を持った単語にしていくようにという相談の引き受け方をします。

天笠　そうなると、むしろ研究のサポートというよりかは、ある種、そこまでくると同じ研究者として、素朴にどう感じるかみたいなところを、素朴に伝えてあげるという作業になるということですよね。

内藤　そうですね。本当にそんな感じですね。

直江　おそらくここにいる3名は、笠井さんも含めですけれども、もともと小さな研究室出身の人がほとんどです。先ほど天笠さんから紹介がありました通り、SFCの

情報系の研究室というのはヒエラルキーがしっかりしていて、教授がいて、准教授がいて、研究員がいて、それで博士、修士の学生がいるので、学部の面倒が見られるということで、おそらくわざわざ窓口に来るまでもなく内省できていますが、そうではない研究室出身の方々がWRCに来ているので、その辺も踏まえて研究の進め方みたいなところ、それこそ事務手続きからというアドバイスをしているかと思います。

では最後に、今後の取り組み、もしくはなぜ我々は博士課程、あるいは博士号取得者でやっているのかとか、相談員との距離感とかって感じたことありますかというところで、まとめさせてもらいます。

内藤　私はまだ心は18歳だと思っているので（笑）、そんなに相談に来る方とのギャップは感じてないつもりですけれども、ただ他キャンパスと違う点は、1年生からずっと同じキャンパスで来ています。ですから、比較的、大学院生というのもすごく接しやすい環境にあるということと、あと科目履修自体が学年で区切りがないので、上下関係というのは、いいのか悪いのか、ほとんどないので、比較的、博士だから行こうとか、博士課程の人だから相談しにくいというのは、あまり感じたことがないように思います。

天笠　そうですね。そういうフラットさは、我々にとってもある種やりやすい環境なのかなというところはありますね。これも半分、雑談ですけど、指導を終わった後に、いつもお世話になっているというのでクッキーを1枚もらったりすることもあり、そういうこともあると、ちょっと心が嬉しくなるんですけれども、そういう嬉しさも感じながら、取り組ませていただいているという状況ですね。

直江　ありがとうございました。では最後に今回、「学びの連携」公開セミナーに当たって、他地区の相談員の皆様と一緒に議論する機会を経てから登壇させていただけましたが、やはり我々はわりとSFCで独立してしまっていたので、あまり他地区の状況って分かっていなくて、我々はすごく特殊だろうなと思っていましたけれども、実際に皆さんとお話しすると、実は同じような、わりと根本的なところで、似たような悩みだったり問題を抱えていたということがよく分かりました。

一方で、やはり院生までも面倒を見るというSFC地区特有の悩みとか解決したい問題というのがあったんだなと思いますので、今後ともぜひキャンパス間、相談員と教職員の皆様と一緒になって、このまさに学びの連携というところで、しっかり進めていければなと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

全体ディスカッション

司会　3キャンパスの活動について、それぞれのキャンパスの特性に根差したバラエティーに富んだ活動の報告をいただきました。それを受けてディスカッションに入りたいと思います。

羽田　日吉メディアセンターの所長の羽田でございます。日吉の学習相談アワーは内輪の話になりますので置いておくとして、S-Circle や WRC はとても面白い発表を聞かせていただきました。ありがとうございました。少しテクニカルな質問です。2つのグループに共通した質問になると思いますが、まず S-Circle の学生スタッフのところで、いただいた資料に公募で 22 名と書いてありますが、実際は公募した場合にどれぐらいの応募者数があるのか、ある種の定員みたいなものが設けられているのか、人数によっては選抜が行われているのかどうかを、スタッフの方にお聞きしたいと思います。あと WRC の方に関しては、今日のお三方も含めてどうこの活動にかかわっておられるのか、つまりどういう経緯で選ばれたのか、自主的に参加されたのかなどといったことを含めて、メンバーのリクルートについてお話を聞かせていただければと思います。

伊藤（S-Circle）　まず定員についてですが、理工学部は全部で 11 学科ありますので、そこから満遍なく各学科 2 人ずつで、定員 22 名と基本的に考えています。実際に募集を掛けると学科によっては偏りがあり、特定の学科で人が集まらなかったりするので、満遍なく 2 人ずつは少し難しいですが、そういう意味で一応定員は 22 名になっています。応募が多かった場合は、メディアスタッフと学生スタッフの有志が面接をして、S-Circle の活動について説明をして、実際にその学生が活動を続けられるかどうかを確認します。

直江（WRC）　どういった経緯でコンサルタントになったかという話ですが、先ほどのパネルディスカッションでも少し言いましたが、もともと 3 人とも小さな研究室に所属していて、その研究室内で業務ではないですが、同じことをやっていたことがまず大前提としてあります。それをもう少し輪を広げた形で、しかもアルバイト代が出ますという形で、お話が来たのがあります。どうしてコンサルタントであったかは個々人で経緯が違いますが、公募という形は取りませんでした。そこが問題意識としてはありまして、今後長期的に運営するに当たって、どうやって人材を確保するかという問題に今は直面しており、まだ解決策は見当たっていない状況です。

一般参加者　それぞれの相談活動における、最終的な理想、どういくとゴールにたどり着いたとお考えでしょうか。

間篠（学習相談アワー）　日吉の方で統一的なコンセプトデザインが、はっきりとした形であるかというと、そうではないと思います。この学習相談アワー以外でうまくいっていれば、例えば同期で聞き合ったり先輩後輩で聞き合ったりするという関係がうまくいっていればそれでいいと言われれば、確かにその通りだと思います。ただ、そこから漏れ出てしまう人も多いですし、三田の学生の中にもゼミに所属していない学生はかなり多くいます。そういった人たちは、学習面で先輩後輩の間柄をつくりにくいところがあります。

　実際に秋学期ですか、三田から 4 年生が卒論の相談に来ました。論文の書き方を全然習ったことがないそうです。1 ～ 2 年生の段階あるいは最初の段階でクリアできていればそれでいいでしょうが、そこからこぼれてしまう学生がやはりいますので、そういった方々をうまくフォローしていければと思っています。

荻野（S-Circle）　S-Circle はコンセプトとして、「塾生の塾生による塾生のためのコミュニケーションスペースをメディアセンターにつくる」というものがあるので、目標として 1 つではないですが、メディアセンターの中に立ち寄って、気軽に相談できるようなコミュニケーションスペースをつくっていければと考えております。

天笠（WRC）　私の私見も入りますが、大きな目標は極論を言えばないと思いますが、その都度設定していくものかと思っております。私は社会調査の人間なのでこう言いますが、この試みの場合、実際に学生に対してヒアリングを行って、学生のニーズを把握する行為と、学生のコンサルティングを行う行為が表裏一体になっているので、その都度調査も行いながら、実際のオペレーションも行うものになっています。やりつつそこから上がってきたものを踏まえて、その都度学生に対して何をしていったらいいのかと考えて、目標を設定してやっていくのが1つの姿と、私の私見も交じりますけれども思っています。究極的にはコンサルタントブースに誰も来なくなったら使命は終わりかと思っております。

司会　これも私の私見、教員の1人の観点で、考えるところをお話ししたいと思いますが、本来ならば、学生間で、先輩から後輩で、学習の仕方が伝承されていくのが理想だろうと思いますが、そういう学生間の学び合いが、私が学生だった時代より薄れている、学生同士の関係性も、希薄になっているという印象を持っています。

したがって、自然発生的な関係だけではなくて、それを後押ししたり支えたりする何らかのサポートの仕組みがあった方がいいのではないかと思います。それが1つの核となって、そこから学生間の知の継承の仕組みが生まれてくるのではないかということで、学習相談アワーを始めたのが実際だと思います。

不破（教養研究センター所長）　確か塾長の年頭のご挨拶の中で、考える学生を育成することが慶應義塾の教育の目標のひとつであるとおっしゃっていらしたと思います。主体的にものを考える学生を育てるには、やはり学問をすることが大切だという考えが根本にあると思います。高校から大学に入ったばかりの学生が学ぶ日吉キャンパスにおいて、教養研究センターでは、「アカデミック・スキルズ」という科目を設置して、論文を書く授業を行っています。論文を書くために、自分でテーマを立て、論証していく作業がまさに主体的に物事に取り組む知的基盤を形成すると考えています。この過程でつまずいていることをどのように克服していけるのかという活動を、学生目線でとらえ、その解決策をなんとかまとめようという段階まで来ていると思います。教養研究センターの立場から申し上げると、「アカデミック・スキルズ」の授業を履修できる学生の数は限られています。「アカデミック・スキルズ」の修了学生が、今日ご紹介した学習相談コーナーでピアメンとして活躍してくれているのですが、センター設置の科目内では数的には限られる「アカデミック・スキルズ」のノウハウを、さらに塾内的に還元していける形で場を広げていければ、センターとしての役目は果たせるのではないかと思います。「アカスキ」学生が自分の論文を完成させるという一つのゴールを経た後、ほかの学生にその論文完成への手引きを伝えていくことで、いろいろな学生さんに「学問」の楽しさを伝えていくことができれば素晴らしい半学半教です。レポートなり論文を書く際の困難を乗り越えることをまったく関係のない、利害関係のない学生から学生へ、同じ学生同士で一緒に考えていく場を、気軽に聞ける場ができていることが全国的に見てもめずらしいと思います。

何か悩みがあったときに友達に聞く、先生に行くことはあったと思いますが、逆に個人的には関係のない人が何でも聞いてくださいという質問しやすい雰囲気で待っている場所が常設されているということは素晴らしいことで、生活や学習面でのつまずきを早めに、気楽に相談できる貴重な場としても機能しているのではないかと思います。おそらくS-Circleではもっと生活面の相談場として役立たれているようです。日吉の学習相談では学問の入り口のところで、質問に答えてくれる場所があることは、まず高校の学習から、主体的に学ぶ大学での学びの姿勢へのスムーズな移行をサポートしていると思います。もちろん、高校とは異なるレポートの書き方を学ぶことで、単純に学問に結びつくわけではありませんが、主体的に学ぶ基本を身に付けるサポートができれば、間接的には大学生活へのサポートをすることにもなるのではないでしょうか。今皆さんのお話を聞いていてキーワードだと思うのは聞く力を大切にしていらっしゃることで、これは学習相談では聞きに行く側と答える側が上下関係にあるのではなく、学習相談員（ピアメン）は相手の言うことをじっくり聞きながら、そこから解決策をお互いに出していくことを基本としており、聞き出すの

は相談員の力でもありますし、相談者はレポートの課題を語ることで、自分の問題・つまずきを顕在化していくことになります。そのようなやりとりの場がSFC、矢上、そして日吉の各キャンパスのメディアセンターにあるとはすばらしいです。

理想は教養研究センターから申し上げれば、まずは慶應に入学した学生が日吉を出発点として、学ぶことの面白さを感じてくれる学生さんが1人でも増えていくこと、その伴走ができる場所を確保していくこと、それは漠然としているように思えますが、実は大学の存在目的の基幹の部分にかかわるのではないかと思います。そのような学びの面白さを知る場が教員から学生と一方通行ではなく、メディアセンターや教員、「アカスキ」の授業を取った学生がOBとして、キャンパスの特徴を生かしながら、循環を作っていく、横断的なネットワークが作られる場があるのが重要だと思っています。結果的にそれが学問的基盤を作る理想にも、合致していくことだろうと考えます。そのために、本日のようなキャンパス間の情報共有の場は貴重であり、主体的な学生をつくる基盤の部分を、お互いに築きあう窓口にもなっていると思っております。

教員参加者　日吉の教員ですが、特に日吉の相談事例を見させていただいて、何度も同じ質問が出る可能性もあり、学生によっては図書館に入ってフェース・トゥ・フェースで相談員とお話しするのが大変な方もいると思います。FAQを作ったらどうかと思います。また、相談員の仕事は4年間とか5年間しかできないわけですが、そのノウハウや展示企画の成果などを長い期間、生かすために、できるだけパネルにしたり、PDFにしてホームページで見られるようにできればと思います。

松下（学習相談アワー）　私は2年、3年相談員をさせていただいて、そこで得たノウハウ等をできるだけまとめたい思いがとてもあります。ただし、PDFにしたり電子データではどうしても伝え切れない部分といいますか、それこそフェース・トゥ・フェースで、人と人とが話していく中で醸成されるテクニックとか技量をどう残していこうかと、我々も悩んでいるところです。極力上の代、下の代が一緒になって話し合える場を設けるとか、相談に入るときに先輩後輩とが一緒の時間帯に入れるようにする等で、直接に教え合うことをしたりしていますが、やはり不十分なところは実感しており、次世代の継承ですとか人選については、他キャンパスの方とも意見を交換したいと思っています。

野呂（S-Circle）　FAQみたいな形で質問を載せた方がいいかに関してですが、理工学部の場合は個々の質問に

対して特化したものが多く、FAQのような形では難しいかなとは思いますが、「つぶやき」という掲示板がございまして、生協にあるような形でちょっとしたコメントを書いて投稿をしてもらうと、それに関して相談員がコメントを書いて返す形をつくっています。

あとは、S-Circleの場合は過去にどんな企画を行ったのかが、記録としてホームページ上で見られるようになっていまして、細かい具体例までは見られないですが、だいたいの概要は掲載しています。例えば本日紹介しましたポップの企画でしたら、どのようなテーマでそのポップの展示を行ったのかくらいでしたら、分かります。

直江（WRC） FAQとかノウハウの蓄積をしたらどうかという話は、実際にコンテンツは充実させる必要があるかと思って今は実際に作っているところですが、機械的にマニュアル化しづらい部分の相談内容が多いので、特に話を聞いてあげて、その聞いてあげることによって相談に来てくれる人たちの悩みが浮き出てくるところで、話を聞いてあげるのは人間が対応するところで、窓口があることの重要性があると思っています。もちろん形式化できるようなFAQも、ここだけを見てもらえれば問題が解決できるのであれば、そのコンテンツを参照してくださいと言えると思いますが、実感として窓口にいらっしゃる方に関しては、そういったマニュアルがあっても答えられないから来ている学生がほとんどだと思っております。

教員参加者 相談者に名前を書かせて、それをExcelに入れたりしているとのことですが、プライバシーの面でどうか、名前ではなく番号か何かにした方がいいのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

松下（学習相談アワー） 相談者の名前を記録することはいたしておりません。その課題を出した先生とか、誰先生の授業でどういうレポートが出てという情報を残しておりますが、相談者の個人名等は残してはおりません。もちろん番号にして管理しております。

野呂（S-Circle） S-Circleでは、プライバシーの面で名前までは聞き出さないことになっています。本人の了承を取って学科と学年だけは聞いて、それを残す形を取っております。

直江（WRC） プライバシーに関しては、私は情報セキュリティーを専門にしています（笑）。そして実際、問診票には名前も書かせております。まず前提として、これはどういった学生さんがいらっしゃっているかという、傾向を知るための統計としての情報という部分と、引き継ぎのためにどうしても知っておきたい情報であると、お断りさせていただいています。情報の流出等々はセキュリティーをしっかり機能として鍵の付いているところに格納し、我々かメディアセンター職員しかアクセスできないところに置いています。ただその情報の扱いは、しっかり気を付けていかなければならないと思っております。

司会 ノウハウの蓄積ということでいくと、SFCでは、コンサルタント同士で集まっていろいろなことを話し合って、情報共有をしているということでした。それを記録したら面白いノウハウの蓄積になると思います。

直江（WRC） 実は問診票というのは形式上それを使っているだけです。実際は、すごくアナログなことをやっています。相談者が来たらノートを広げて、さっきの聞いてあげることによって、問題が顕在化していくあるいは形式化してくる手助けとして、この時代に何でというノートを使って本人に図を描かせてみて、実際に説明してくださいといったときに、説明することで悩みは解決しましたということが多いです。

ノートには問診票の番号を書いており、この人はこういう悩みを抱えていたと、考えている中身に関しての引き継ぎを実は行っています。こういった相談者が来たことだけではなくて、この人はこういうポイントで悩んでいるところを重視しています。3人しかいなくてもそこの引き継ぎが難しいことがありましたので、こういった試みを始めています。とても原始的な手段ではありますが効果的で、これは今後も続けていきたいと思っています。これからこの中で定式化できるような、マニュアル化できそうなものを、別途FAQみたいな形でアウトプッ

トしてあげるのが、利用者にとって利便性が上がると思っています。（図 4-1）

松本（学習相談アワー）　典型的な質問をまとめておいた方がいいのではないかということになり、スケジューリングやレポートの間違いやすい点などをまとめ、企画展示をしたことがあります。展示だけではなく、展示内容をプリントにしておまけとして配りました。スケジューリングの理想的なパターンやレポートの見本みたいなものです。これが非常に好評でした。

また、3 年半ぐらいピア・メンターをやってきたなかで、分析が蓄積され、ノウハウの蓄積も制度化されたものではないとはいえ、ピア・メンター同士の口頭のやりとりである程度はできてきていると実感しています。

一般参加者　3 キャンパスの活動の連携はどのような状況でしょうか？

司会　3 キャンパスの活動が一堂に会したのは今日が初めてですので、むしろ今後どんな連携があり得るかをお答えいただいた方がいいと思います。現状はどんな壁にぶつかっていて、3 キャンパスの連携によってどんなビジョンが開けてくるかについてお答えください。

間篠（学習相談アワー）　日吉の間篠です。しっかりとお話を聞いたのは今日が初めてですが、この企画をする前の段階でいくつか資料を拝見させていただいたり、サイトを見たりしていました。その中で例えば先ほどの WRC の取り組みの中でのノートを使う手法は、これはいいなと思って取り入れたりとか、私たちの日吉の取り組みの中で使っている PowerPoint のスライドをファイルとして持参していますが、それを他キャンパスの取り組みの中で参照して見ていただいたりとか、そういったツールの面での連携といいますか情報共有は、今日の準備までの間にある程度なされてきたと思っています。ツールに関して今はできていますし、そこがある意味では一番強力に行っていけるところだと思いますが、それ以上の連携ももしかしたらできていけるのではないかと考えています。

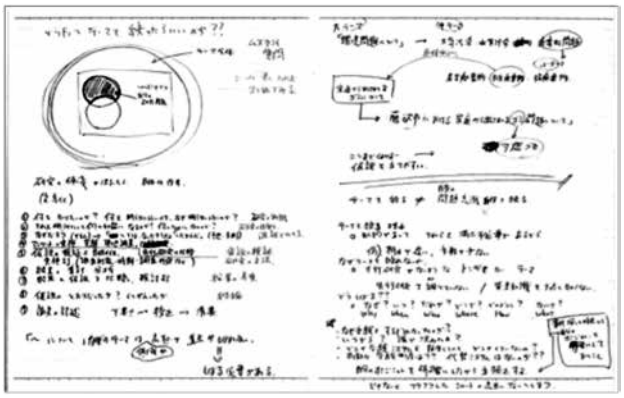


図 4-1　WRC の相談ノート

荻野（S-Circle）　本日の報告をお聞きしていて、やはり SFC でも日吉でも矢上でも、課題に共通点があると感じました。そういう部分に対して課題の解決策を今後ともぜひ共有していけたらと思っています。あとは、各キャンパスでカラーが出ていると感じました。そのカラーのいいところをぜひ共有というか盗んで、今後ともやっていけたらと思っています。

内藤（WRC）　連携なんですが、我々の報告を聞いて皆さんにご理解していただけたと思いますが、専門がまるでばらばらで、論文の書き方やサーベイの方法もばらばらです。つまり何が言いたいかといいますと、3 人で話していて面白いのが、ある 1 人の相談者が来ても、それに対する対応の仕方がまったく異なってくるわけです。でも、それはどれが正解でもなくてどれもそれなりの方法論があるので、根本的には同じなのでぴたりと当てはまっていくとは思いますが、そういった意味で 3 人が話していくときの違いを理解するのは面白いです。そういった 3 人でやっていたこの連携を、例えば他活部の他キャンパスの間でもできたら、より面白い知的好奇心が得られていくと思っています。また、他キャンパス同士の知識の交流によって、相談を受けたときの対応の仕方も柔軟になっていくと思うので、そういった交流ができたらいいと考えています。

司会　この問題はおそらくその相談員の考え方ももちろんあると思いますが、やはりコーディネートする立場の側の視線もあると思います。今日は 2 つのキャンパスの

メディアセンター（図書館）長がいらっしゃっていますので、お考えをいただければ幸いです。

羽田（日吉メディアセンター長） 連携の話、今それぞれのキャンパスの活動を踏まえたお話が出ていて、特に印象的だったのは最後の内藤さんの話です。つまり、さまざまなキャリアを持っている人たちが相談員という立場で顔をつき合わせたときに何が出てくるか、どういう化学反応が起こるのかということです。これは、おそらく日吉の場合もそうだと思いますが、実際そういう形の化学反応が起こってきて、それぞれの中ではいろいろな形で積み重ねられてきているのでしょう。日吉の場合は、具体的な冊子の形で成果としてまとめられていると思いますが、大切なのはそれらに横串を刺す形で、キャンパスという空間的な隔たりをどう解消できるかです。と同時に、それぞれの組織が積み重ね、積み上げてきたものを、時系列的にどういう動きや方向性をもってつなげていくかです。縦軸､横軸を構成していく中で、相談を受ける側にとって、より大きな学びの場ができていくだろうし、できていくのが望ましいと思って聞いておりました。

もう一方では、例えばこういう会が今日初めて行われることも慶應らしいという気がします。慶應独自の環境でいえば、キャンパスが離れていることはよくも悪くもいろいろな場や局面で大きな影響を与えていると思います。もちろん、長いタイムスパンで持続的にこういった活動が継続され、積み重ねられて発展していくのが望ましいと思いますが、ある面ではどこかで無理をしない工夫も必要ではないでしょうか。たとえば活動を継続させるために月 1 回ミーティングを開こうということになっていくと、それが負担になってしまって、参加する人自体がだんだん減ってしまう、二の足を踏んでしまうこともあると思うので、その辺は多少ルーズに考えておいてもいいのではないか。逆に慶應がこれだけ多くのキャンパスを抱えていることの特性を生かす上でも、そこの距離感の測り方をうまく工夫しながら、同時に無理のない持続可能な連携の方策をぜひ考えていただければと思っています。

前田（矢上メディアセンター長） 理工学部の S-Circle は、未来先導基金を使わせていただいて始めたものです。これは学生の方にご紹介していただいたと思いますが、思い切ったことをやってみる意味で始めた企画としては、僕はすごくいい画期的な活動ではと思います。理工学部はどちらかというと藤沢と比べるとはっきりしていると思いますが、やはり積み上げの学問体系で 1 年生から順次こういうものを理解して、これが分からないと次にいけないというステップです。だから藤沢とは少し違いますが、そういう意味で学生が大学に入ってから、高校で習ったカリキュラムと大学のカリキュラムの違いも、かなり痛感していると思うんです。

自分でもこのぐらいのことが分かっていると教えますが、実際には本当は分からない部分が出てきます。先生が聞きにいらっしゃいと言っても聞きにこられない、これは聞いたらもしかしたら恥ずかしいとか、こんなことを聞いたらいけないと思うことがあると思うんです。そういうときにやはり学生の目線で、何かこういうことが分かってないことを掘り出してあげます。そういうものがあるのは違うと思います。例えば、僕らと今の入ってくる学生では、自分のあるいは真上の子たちが入ってくるわけですから、だいぶ違うと思います。そういう意味で大学の中に､そういう循環的な部分ができているのは、大事なことだと思っています。僕らとちょうど中間的な学生さんたちがうまく連携していくのは、理工学部の教える特色から見ても必要ではないかと思って、ぜひこれが継続されるといいと思っています。また学生さんにとっても、自分がこういうことをやってみる経験は、これから先自分たちが社会に出たり、大学に残ってもそうかもしれませんがいい経験になるので、こういうことにぜひ学生さんたちが積極的にかかわってくれるのは、僕はぜひ進めてもらいたいと思っています。

今日は日吉と藤沢との連携になっているわけですが、理工学部はそういう意味では少し孤立しているかもしれないと思います。やはりいろいろなところで、あとで日吉とか藤沢の人たちとも話をしたりして、違う側面も見てもらうとよりこういう活動に、いい方向へも進むアイデアも出てくると思います。ぜひ、これが続けられるといいと思っております。

コメント

常任理事　長谷山彰

本日はこのセミナーにお招きいただきまして、ありがとうございます。私は教育担当とメディアセンターの担当ですので、おそらくその関係で呼んでいただいたと思います。大変充実したご報告、ディスカッション、今のいろいろなやりとりを聞いて、ほとんどもう今後についても出尽くしている感じです。私自身が大学に入った1年のときはレポートで苦労して、たくさん参考書を読んで出来上がってみたら、それは抜き書きの寄せ集めだった苦い経験がありまして、今のこういう仕組みがあれば、もう少しまともに勉強できていた気もしております。

せっかくの機会ですので少し申し上げると、3つのキャンパスそれぞれのプロジェクトの相談員は特色ある活動をしていて、学部生による学部生の相談もあれば、大学院生まで対象にしているもの、多様な研究分野を持っているキャンパス、学生生活の相談や就活相談まで受け付けるなど多様な相談活動があったと思いますが、ただ共通する部分も多いと感じました。1つには、塾生による塾生のためのピア・サポート、コミュニケーションの場づくりという、これがキーワードだと思います。

そして、いずれの活動も図書館を場にしていることですね。おそらくこれは学びの場としての図書館の機能を考えることにつながっていくと思います。古い図書館には、古色そう然たるツタの絡まるれんがの建物で、静謐で柔らかなやや暗めの照明の下でみんながじっと本を読んでいるとか、あるいは膨大な資料、コレクションがあってそれを研究者が使っているイメージがあります。しかし、実際には大学の図書館は、学びの場であるべきだと思います。実は私の学生時代は、三田の旧図書館の地下は、完全に開放されたグループ学習用の部屋で、6人掛けのテーブルがたくさんあり、何をしてもいいので、コーヒーを飲んだり、たばこの煙もぼうぼうで、みんながわいわい言いながら、あそこのゼミはどうなっているとか、あの学説はどうとか、喫茶店、サロン状態でした。今日のお話を伺って図書館は知的、文化的なサロンという機能を再び期待されていると感じました。

次に、これは皆さんが話されていますが、新しい学習スタイルに合った場の提供です。最近は少人数でレポートやプレゼンテーションが要求される授業が増えています。一番そういうことに慣れていなくて苦労しているのは、初年次生です。3～4年生、大学院生はゼミもあり研究室もありますが、初年次生にはレポートの作成法とか、学問とは何かといったことを伝える必要があります。でも教員のところに相談に行くのは抵抗感がある。同じ世代の人になら聞きやすい。行きやすいということは、大事だと思います。

それから、これも皆さん共通していたのは、すぐに正解を出すのではなくて気付いてもらうことが重要だということです。直江さんがお書きになった「自己発見のお手伝いをするんだ」ということです。人に説明をすることで相談者自身が問題点に気付いていく。自己発見の手伝いを相談員がして、そして相談員自身の学びにもなる。そういう意味では、学生の半分が相談員でもう半分が相談される側で、時々それが入れ替わるような、イメージが理想だと思います。

もう1つは、カウンセリングの原点は聴くことだという点です。皆さん実際に相談をした経験から、これが大切だと気付いておられます。『二十四の瞳』という淡路島の分校に、高峰秀子という女優が演じる先生が赴任する映画が半世紀前にありまして、その中でクラスに貧し

長谷山理事

くて学校に来られない生徒が出てくる。先生がその子の家に訪ねて行って、学校に来させてくださいと親に頼むけれども、親もどうにもできないと言います。子どもと2人で海岸に行っていろいろ話を聞いて最後に先生が「分かった。先生は何もしてあげられない、でも一緒に泣いてあげる」と言うんです。これはカウンセリングの原点だと感じます。

最後にコメントが私の役割ですので、課題といいますか、これも皆さんがお気付きになっていることですが、どこまでが相談者の役割かを絶えず確認していく、これはとても大事だと思います。内容によっては学生相談室に紹介するとか、学習指導に紹介することも必要だと思います。それから、矢上では食と健康についても何か企画をされているということでしたが、すでに学生健保が朝食サービスを生協食堂と一緒にやったりしています。カウンセリングでいうとSC（Student Counselors）やKOSMICなどの団体もあります。そういう課外活動団体と情報共有をしていくことも必要になってくると思います。

それから、認知度を上げる工夫が必要だと皆さんがおっしゃっいましたね。いろいろな試みをされているようですが、やはり見えてきたのは、教員とどう連携していくか、その中で認知度を上げていくことだと思います。正課の授業の枠組みから飛び出して、相談を通じて学びの場を広げていく。もう少しきざに言えば、研究か、教育かということが教員の間では話題になりますが、実はこれは融合しているものなので、おそらく相談員の皆さんは研究と教育をつなぐ、架け橋になれると思います。

もっといえば、教員を巻き込むという意味では、こういうときになぜ学部長をゲストに呼ばないのでしょうか。塾長は義塾の学長でもいらっしゃるので、見ていただくのはとてもふさわしいと思いますが、理事は制度的な位置付けとしては法人の人間で、財政的な要望であれば、それなりに意味があると思いますが、出せるかどうか分かりません、出せないことが多いです。むしろ学生、大学院生が主体的に悩みながら頑張っているところを、教学の責任者の立場の方に見てもらうことがとても大切ではないかと思います。ぜひ、こういう催しをされるときには、学部長を呼んでみて下さい。

最後に、くり返しになりますが、学びの場としての図書館という発想をぜひ大事にして下さい。今は大学の周辺に喫茶店もなくなりジャン荘もなくなり、学生が集まってわいわいしゃべったり、一緒に勉強したりできる、フェース・トゥ・フェースの場がないのです。学生生活実態調査を見ても、授業のない日のキャンパスの滞在時間は0時間と答えている学生が90％近いです。授業がなければキャンパスに来ません。忙しいこともあるでしょうが、キャンパスに魅力がないからです。矢上の相談で学習相談の次に多いのは、雑談だそうですね。これはとても大切で、授業やサークルとは別に誰かと話せる場は重要で、私的なサロン、カフェのような場が必要です。図書館が学生の居場所というか止まり木となればいいと思います。

教養研究センターのこの催しは、学び場プロジェクトから始まっています。授業の「アカデミック・スキルズ」とこの相談プロジェクトをつなげるという試みだったと思います。大学の中に学生の居場所、止まり木をつくっていく試み、特に図書館を学生の居場所にする発想を、今後も大切にしてもらえたらと感じました。今後ともそれぞれのキャンパスでのプロジェクトが長く続くように期待して、また、プロジェクトを支えて下さっている教職員の皆様に感謝申し上げて、私のコメントといたします。どうもありがとうございました。

コメント

塾長　清家篤

今日はこのような会にお招きいただいて、ありがとうございます。今日､日吉の学習相談をされている方々、矢上の S-Circle の活動をされている方々、SFC の WRC の活動をされている方々のお話を伺って、とてもうれしかったのは皆さんが楽しそうにプレゼンテーションをされて、自分のやっていることの意義を強く感じながら、生き生きと報告してくださったことです。すでにいろいろな方からの説明にあったと思いますが、やはりこういう活動の一番大きな意味は、その活動をされる方が他者への貢献による充実感を得られることで、それが本当に大切なことだと思っております。

慶應は今でもあまりお金がないですが、昔はもっとお金がなくて専任の教員などをあまり雇えなかったので、半学半教になっていったといわれています。しかしそれは結果として、今日の慶應義塾における塾生は単に教えてもらうだけの存在ではなくて、互いに教え合いまた触発し合っていく存在だという教育の形をつくった意味では、大変ありがたい伝統だと思っております。その半学半教のやり方もいろいろあるわけですが、先ほど天笠さんも少しおっしゃっていたように、半学半教の具体的な仕組みの 1 つとして今日の 3 つのグループの活動があると思っています。

清家塾長

もちろん半学半教は実際には、そういうシステムができる前からもちろんインフォーマルに、系統立たない形で、その時々のかなり偶然的に友達同士でなされていたというところがありますし、今でもそれはあります。それはそれでとても大切だと思いますが、そういうものをもう少しシステマチックに、系統立てて少しフォーマルな形にして、しかも常設的にそこに行けば相談が受けられる形にされたのが、1 つの大きな意義だと思います。今日のお話を伺っていて日吉の場合ですと 2 年生や 3 年生の人も参加しておられ、SFC の場合はすでに研究者になっておられる方が、矢上の場合には 4 年生やマスターの塾生が中心になっているといったように、少し形が違ったり扱っている範囲も違ったりしましたが、研究の仕方、論文の書き方の指導などはかなり共通だと思います。

前田先生も言われたように、おそらく大学が高校と一番違うのは、大学に入ると研究をする、ということだと思います。その研究というのも、ただやみくもに考えることではなくて、まだ誰も答えていない問題を見つけてきて、それについて自分なりの仮説をつくって、それを自然科学であれば実験、社会科学であれば統計などを使って、また人文科学であれば文献の調査などによって、誰もが納得してくれるように検証して結論を導く作業で、それはやはりかなりの訓練を要する、一定の型を必要とするもので、その型を覚えたりしないとできないものです。そういうものを我々が最終的には、教員として責任を持って教えていかなければいけないですが、これも前田先生がおっしゃっていたと思いますが、教員には恥ずかしくて聞けないとか敷居が高かったりするところを、まずは塾生同士で教え合っていただくのは我々にとってもありがたいことですし、また学問の作法を塾生同士がお互いに確認し合っていくことは大切なことだと今思いました。

このような形である程度フォーマルに、システマチックに、またどこかに場を設けて行う活動ができてきたことは、とてもありがたいことだと思っています。同時に、やはり従来からある友達同士のインフォーマル

な、かなりアクシデンタルというかアドホックな教え合い、その時々でお互いに教え合うというところも残していかないといけないと思います。従って、こういう皆さん方の活動と、インフォーマルな友達同士の教え合いが、相互に代替的なものではなくて補完的なものになってほしいなと思っています。

もう1つは、広報という話がありました。私はどこが均衡点というか、正しいか分からないですが、ODAなどではアポン・リクエスト・プリンシプル（upon request principle）、つまり要望に応じて援助を与えるというプリンシプルが王道だといわれたりします。つまりピア・メンターの活動が、そういうアポン・リクエスト・プリンシプルでいくのであれば、そんなに広報はしなくてもいいのかもしれないです。つまり本当に必要な人たちだけが、そういうサービスを受けられます。確かにサービスを必要としていない人にまで、こういうのが便利だから少し聞いてみたらという感じで、押しかけたりしない方がいいのかもしれません。

しかし同時にやはり独りでいろいろ悩んでいて、こういう助けがあれば何とかなったのにそうならない人がいるのも残念です。先ほど天笠さんが最終的にはこういう仕事がなくなるのがいいことだとおっしゃいまして、本当にそのとおりなのですが、やはり助けを必要とする人は必ず残ると思うのです。そういう人がせっかくの機会を知らないで、独りで悩んだり失敗してしまったりします。もちろん失敗することも大切なことですが、挫けないようにするためにはどうしたらいいのか、そこのバランスです。あまりお節介になってはいけないが、しかし同時にこういうサポートもあることを多くの人に知ってもらう。それにはどうしたらいいのかも、1つ課題だと思いました。

今日、ここで初めて日吉と矢上とSFCの活動が一堂に説明されて、そこで情報が交換される機会があったのも良いことだと思います。同時にそれぞれ個性があることも良いことですし、先ほど先生も少しおっしゃっていましたが、これを機会にいろいろ意見を調整し、システムを整えるとなると少し堅苦しくなってしまって、言い方はあれですが、慶應の本来の半学半教のいいかげんさというか、いいかげんだからいい面もあるので、そういうところも残していただきたいと思います。

先ほど内藤さんも以前相談をしたことがあって、今は相談員となってそのときの経験が生きているとおっしゃっていましたが、私もこれからこういう制度が充実していくときに、相談した人がいつかは相談員になっていく連鎖が生まれてくると良いと思います。また先ほど長谷山先生も言われたように、もちろん半学半教の理想は、あることについて相談した人たちが別のことについては相談を受ける側となって説明するシステムだとも思います。

私どもは、塾生を顧客とは思っていません。学生の顧客満足というような言い方もありますが、学生は決して顧客ではありません。その1つの意味は、もちろん4年間だけのお客さんではなくて、塾生となった人たちは生涯人生の後輩として気に掛けていかなければという意味で、お客さんではないということです。もう1つは今日の活動のように、塾生は我々にとってカスタマーではなくてパートナーだということです。塾生は我々から単に教育サービスを受けるだけではなくて、我々と一緒に慶應義塾の教育をよくしていく同志というか、パートナーという意味も込めて塾生は決して顧客ではないのです。仲間というと少し語弊があるかもしれませんが、塾生にも慶應義塾をよくするために貢献をしてもらいたいと思っています。

良い大学の条件は、そこに行くと良い教育が提供されるだけではなく、そこに行くと良い友人、良いピアに会える学校だと思っておりまして、そういう面では今日伺った皆さん方の活動は、まさに私が普段そうあってほしいと思っている大学の条件を具現化している活動そのものです。今日の皆さん方のお話を伺って、あらためて私も自分の考えは間違っていなかったと勇気づけられました。そういう面も含めてあらためて皆さんの活動に御礼を申し上げますとともに、また不破先生をはじめとする教養研究センター、羽田先生、前田先生をはじめとするメディアセンターの先生方にも感謝を申し上げて、私のコメント、というよりは感想とさせていただきます。どうもありがとうございました。

おわりに

教養研究センター所長　不破有理

もう長い時間にわたっておりますが、最初に学生諸君に御礼申し上げたいと思います。このピアメンを支えているのは本当に優秀な学生さんです。昨今、よくマニュアル本でしか動けない学生や若者が多いといわれますが、まさに皆さんが毎日、学生相談のピアメンの場でやってくださっているのは、マニュアルにはない臨機応変な人の力を発揮して行っていることだと思います。相談に共通な項目をまとめて、相談者の用途に配布したりして蓄積をしていくことは大切ですが、今回のような取り組みを動かし可能にしているのは人の力だと思います。この半学半教ができるのは、このような学生さんがいる慶應だからだと思います。それは、本当に素晴らしいことだと思います。

連携の在り方ですが、ピアメンたちが培った方法をお互いに開示し合って、いろいろなキャンパスに出前をしていくのは一つの方法であると思います。いろいろな便利なツールをお互いに使い合う、それも簡単にできることだと思います。それと同時に、学生自体が回遊してもいいのではないでしょうか。SFC の学生は、私たちはなぜか SFC の近くに住んでいると思い込んでいます。しかし、SFC の学生は横浜に住んでいることもあります。三田に行っている学生が、日吉にも住んでいるわけです。この三つの取り組みが三つのキャンパスにきれいに色分けされているのは素晴らしいことで、その特色に合うところに学生が行ってくれればいいわけです。逆に言えば、そういう学生を各キャンパスが受け入れる包容力が、この慶應義塾大学のキャンパス相互間の中で醸成されていくことで、素晴らしい学びの連携ができると思います。

「学びの連携」はそもそも、社会地域連携をどうすべきかと方策を考えている際に頭が痛くなるような案件があり、その際に、さまざまな専門の方のお知恵をお借りしたいと、メソッドを教えていただく公開ワークショップを行いました。SFC の飯盛先生のケースメソッドをご紹介いただいたり、システムデザイン・マネジメント研究科の前野先生や保井先生のシステムデザイン手法が登場したり、まったく人文科学とは違う分野のメソッドを教えていただきました。

公開講座に先だち、その打ち合わせを保井先生と種村先生と私の 3 人でお話をしているときに、「これは人文科学にも使えるのではないか」とひらめきました。何かものが起こるときは、異分子同士がぶつかったときに触媒化学反応が起こって、そこからひらめき、それが推進力になっていくと思います。何か物を作るときのシステムの段階での異文化間、異なるキャンパス同士の専門が異なる者同士、方法論が違う者同士が、お互いに問題解決をする方策を求めて交流することによって、素晴らしいアイデアが出てきます。それは、この一つの「連携のワークショップ」から見えてきたことです。

さて、一つのシステムを動かすには、アイデアと人と資金が必要かと思います。検証をして不要であれば、やめればいいわけですが、今回の三キャンパスの取り組みを学び合う公開セミナーを通して見えてきたのは、それぞれの取り組みへの思いと意義、そしてそれぞれの取り組みを支えている皆さんの人の力です。先にも述べました、学生さんとメディアセンターの職員の方たち、学生を教えている教員の方たちだと思います。そのうえでシステムを続けていくには軍資金が必要になる場合があります。ここで塾長と学務担当理事のお二人を前にしてお話する意味があることを、まずここでメッセージとしてお願いしたいと思います。例えば S-Circle ですと先導基金が 3 年間で終わります。縛りがあまりない、自由な発想と取り組みをしていいと、学生に投げると素晴らしい力を発揮します。もちろん自由にやってよいということであっても、ドレスコードではないですが、行動のコード（規範）があると提示していらしたのは素晴らしいと思います。ですからぜひ自由に活動をしながら学生を育て、育ち合えるような資金は、ぜひ目配りをいただければと思っております。

学びの連携はいろいろな形の相互の動きがありますが、このような形で大勢の方にお集まりいただいた貴重な時間を本当にありがとうございます。また、お忙しい中、清家先生、お時間を割いてくださり、そして

長谷山先生にはいつもご出席くださりありがとうございます。本日は長い時間にわたり、ご臨席ご意見もいただき、重ねて御礼申し上げます。今後とも、第2回の報告会もできますよう、頑張ってまいりたいと思っておりますので、ぜひよろしくお願い申し上げます。

学習面におけるピア・サポート活動の動向と日吉学習相談アワーの特徴

間篠剛留（慶應義塾大学大学院　院生）

1. はじめに

本稿の目的は、近年多くの大学で行われるようになった学習面におけるピア・サポートの動向を整理し、慶應義塾大学日吉図書館で行われている「学習相談アワー」の特徴を明らかにすることである。この検討を踏まえ、「学習相談アワー」や学内外のピア・サポート活動の今後の発展の可能性を述べたい。

近年、国内の多くの大学において、様々な形で学生同士の支援関係の構築が試みられている。川島によれば、「最近の注目すべき傾向として、ピア・サポートなど、学生自身を、学生支援の取り組みや正課教育・正課外の諸活動、さらには大学教育の運営に参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度を、その相互関係の中で高めていこうとする試みが広がってきている」という（川島 2010, 14）。これらの取り組みは初年次教育の一環として整備され、大学一年生を包括的にフォローするための手段としても活用されているようである。また、2007 年には「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」が、2009 年には「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」がはじまったが、これらの事業によって学生による学生支援（ピア・サポート）の取り組みも一層促されている[1)]。

本稿で扱う「学習相談アワー」も、このようなピア・サポート活動の一つとして位置づけられる[2)]。開始 6 年目となり、徐々に体制の整ってきた学習相談アワーであるが、まだ模索の段階であり、今後の発展の余地が多分に残されているといえる。国内の他の大学の取り組みについても同様に言えることであるが、他の大学の実践に学びながら体制をより整備し、取り組みの意義についても明確にしていく必要があろう。そのためには、国内のピア・サポートの実践について、その傾向を把握し、今後の課題を明らかにすることが重要である。もちろん、学習相談アワーの取り組みから得られた教訓は、その取り組みの改善だけに有益だというわけではない。評価できる点と課題について整理しておくことは、他のキャンパスや大学で行われている同種の試みの改善に対しても有益であろう。

そこで、本稿の課題として以下の二つを設定する。一つは、学習面でのピア・サポート活動の国内の事例を整理し、その傾向と課題を明らかにすることである。もう一つは、上で明らかにした国内ピア・サポート活動に照らして学習相談アワーの特徴を明らかにし、今後のピア・サポート活動への示唆を得ることである。まず 2 節において、大学におけるピア・サポート一般についての利点および課題について先行研究の指摘を整理する。次に 3 節では、国内における学習面でのピア・サポートを 4 つに分類し、その傾向を分析する。続く 4 節では学習相談アワーの特徴を整理し、現在のピア・サポート活動に対してもつ意味を提示する。最後に 5 節では、日吉学習相談アワーの課題を提示するとともに、今後の発展の可能性を検討する。その際、学内他キャンパスの取り組みとの連携から生じうる慶應義塾大学全体でのピアメンタリング・システムの可能性を検討したい。

なお、3 節において検討に用いるのは各種の報告書や雑誌論文での成果報告、ならびに各大学等のウェブサイトである。ウェブサイトに掲載されている情報は限定的なものであることも多い。しかしながら、学生による学習相談については大掛かりなプロジェクトとして行っているところばかりではなく、必ずしも報告書や雑誌論文といった形にまとめられているわけではない。このような状況で国内の大学のピア・サポートのおおまかな傾向を知るには、ウェブサイトの情報も有効であると考えられる。

2. 先行研究の検討およびピア・サポートの利点と課題

2－1. 先行研究の検討

現在のところ、「ピア・サポート活動はまだ萌芽期にあり、効果検証といったレベルで成果が示されている

ものは少ない」状況にあるといわれている（山田 2010, 11）。効果検証が行われていてもそれは各大学の個別の事例についてのものであり、大学におけるピア・サポート活動の意義や効果について包括的に検討した研究は、これまであまりみられなかった。しかしながら、近年、複数のピア・サポートの事例を検証し、大学におけるピア・サポート活動についてその効果や意義に迫ろうとする研究もいくつかみられる。

大石らは、大学学生支援領域におけるピア・サポート活動について国内の五つの事例を概観し、「(1) 相談活動として、(2) 修学支援として、(3) 新入生支援として」の三つに分類した（大石他 2007, 107）。そして、「ピアサポート活動が大学で育つためには、大学内での管理職をはじめとする全学でのしっかりとした支えと、ピアサポーター養成やサポートチームの運営に携わるスタッフの存在が不可欠である」ことや、「ピアサポート活動が、学生同士が積極的に助け合う風土をつくり、ピアサポーター自身にとっても、コミュニケーションスキルの向上をもたらし、心理的発達や人格的成長を促す効果をもたらしている」ということを指摘している（Ibid., 118-119）。また、山田は、立命館大学、名古屋大学、島根大学のそれぞれで行われているピア・サポート活動の例を取り上げ、ピア・サポート活動がどのような教育的効果をもつかという点を検討している（山田 2010）。ここで指摘されたのは、相談に応じる際の「ピアならではの視点の有効性」や、相談に応じることによる「サポートを行う側の成長」であった（Ibid., 12）。また、ピア・サポート活動の推進に伴う課題として、「サポーターへの研修・トレーニング」が重要であること、「人的・物的環境のハード・ソフト両面での整備が不可欠である」ことが挙げられている。そして、「大学院生を中心としたアドバイザーを組み込んだピア・サポート組織」や「サークル活動や授業とは異なる、教職員による教育指導」、「大学内での管理職をはじめとする全学でのしっかりとした支えと、ピアサポーター養成やサポートチームの運営に携わるスタッフの存在」が必要であると、山田はまとめている（Ibid., 13）。

2－2. ピア・サポートに期待されることおよびピア・サポートの利点

ピア・サポート活動の利点としてまず考えられるのは、相談者にとって、という観点からである。相談者にとってのピア・サポートの利点は、相談者自身の立場と近い人間が支援をしてくれるというところにある。それは学習面に限らず、生活面にもおよび、生活面を支援することによって結果的に学習面を支援するということも考えられている。

例えば山内は、オフィスアワーを開設して行われる教員による学習相談と大学院生による学習相談とを比較し、次のように述べる。「本学においてもオフィスアワーを開設しているが、緊張するなどの理由から教員に直接質問に行くことができない学生が多くいることも事実であり、大学院生による学習支援は、教員に直接質問に行けない学生たちへの窓口になると考えられる」（山内 2008, 47）。また、細川はピア・サポートの有効性として「学生同士という関係が気軽であること」を指摘しているし（細川 2008, 2）、山口大学の大学院生による学習相談については「教員のオフィスアワーより気軽に相談でき、先輩・後輩として授業体験も共有しているため、ツボを得た親切な対応がなされている」との評価がなされている（山口大学大学教育機構・山口大学教育職員能力開発（FD）委員会 2006, 106）。これらの記述に共通してみられる「気軽に」という点が、重要な点となっている。心理専門職が関わる問題の手前の「ちょっとした悩みや疑問、先輩学生の経験でも答えられる、情報提供で解決するような相談」に学生がこたえるとともに、「ちょっとした相談に来た学生の中にある潜在的な深い悩みや問題に気づいて、専門家への橋渡しをする」役割がピア・サポーターに期待されている場合もある（大石 2010, 18）。これまで、「ちょっとした悩みや疑問」が解決される場所は大学内の制度としては存在していなかった。そこで、ピア・サポートを導入して軽微な相談を受け付け、専門相談窓口への橋渡しを行うことで、より深刻な問題についても対処されやすい状況がつくられている。

また、相談者に対する利点としては、情緒的サポートの提供という点も指摘されている。内野は、「身近な人に弱さを見せることに抵抗を感じたり、友達に相談して

困らせてはいけないと感じている学生が多い最近の傾向の中で、専門家のところへ行くほどではなく、友達に相談するのは憚られる場合、日常的な対人関係のないピア・サポーターが相談役として、情緒的サポートを行っている」と述べる（内野 2006, 21）。

次に考えられるのは、相談員にとっての利点である。ここでは、教えることによる学びという点が最も強調される。山内は大学院生による学習支援の効果を、学生への効果と大学院生への効果の二つに分けて論じている。そこで山内は後者について、「教えるために必要であるということから、再学習する」ことと、「相手の立場に立ち、理解する」というソーシャル・スキルを身につけることを指摘している（山内 2008, 52）。また、空き時間に行っている集客性を上げるための広報活動や、ニーズ調査によってマーケティングに関するスキルも養われるとしている。また、大石らは山口県立大学でのピア・サポーターの養成研修において、質問紙調査の結果、自己に対する意識の好転という結果がみられたと報告している（大石他 2010, 40）。同様に内野も広島大学の取り組みのなかで、相談員の傾聴技法が向上したり、心理社会的な成長が促進されたりしていることを指摘している（内野 2006, 22）。

そのほか、経済支援の側面にも言及がなされている。山形大学のアドミニストレイティブ・アシスタント制度は、「国立大学法人山形大学が行う学生支援などの業務に、就学に支障のない範囲において本学の学生を参画させることにより、学生の視点に立ったサービスも取り入れるなど学生支援業務等の充実を図るとともに、学生の就業意識の向上を図ることを狙ったものですが、併せて学生に対する経済的支援も目的としている」（奥山 2010, 26）。学生に対する経済支援という側面は看過されがちであるが、制度を包括的に考えた場合、検討されるべき問題であるといえよう[3)]。

最後に、大学に対しての利点を検討したい。ピア・サポートに関する多くの研究や報告は学生の利点を強調することが多いが、中にはピア・サポートの活動を大学全体の改善に活かそうとするものもある。山形大学の図書館の学習サポート AA（アドミニストレイティブ・アシスタント）は、学部生からのレポート作成や文献検索についての質問に答えアドバイスを行うというものであるが、「相談を受けた後には、その内容を記録し、学習のどの部分でアドバイスが必要なのかなどの傾向をデータベース化する業務も行って」いる（奥山 2010, 28）。この取り組みにより、AA を通して学生の学習上の行動傾向を具体的に把握することが可能となるため、業務改善にもつながると考えられている。普段は表出しにくい学生のニーズを把握し、大学の運営の改良に役立てることは、その他いくつかの実践の中で意識されている[4)]。

このようにして、ピア・サポートの試みは相談者、相談員、大学と、それぞれに対して利点をもつものとして捉えられている。しかしながら、ピア・サポート活動に関しては、現在さまざまな課題が提示されている。次項でこの点について検討したい。

2－3. ピア・サポートの課題

ピア・サポート活動の課題を検討していくと、量的拡大が必要であるという意見がまずは目につく。山口大学の FD 報告書では、学生支援についてアンケートを取り、次のような課題を認識している。すなわち、「学生にアンケートをとった結果、開いている時間が少ない、時間帯が自分にとって都合が悪い、といった開設時間についての意見が多いが、カリキュラムの構成上困難であり、財政面の都合により、現在の開設状況で精一杯といったところである。回数を増加させ、もっと多くの学生を支援することが、今後の課題である」（山口大学大学教育機構・山口大学教育職員能力開発（FD）委員会 2006, 106）。確かに多くの大学においてピア・サポート活動は始まったばかりであり、十分な時間や人員が確保できていない状況にある。

また、活動の質の向上についても様々な課題が指摘されている。多く指摘されるのは、利用しやすさの問題である。永井らは、ピア・サポートをより利用しやすいものにするため、ピア・サポートを利用したことのない学生にアンケートをとり、今後の課題を検討している。そこで永井らは、「雰囲気」や「場所のわかりやすさ」に加え、ピア・サポートへ「行きづらかった」理由を尋ねることにより、活動方法の改善への具体的示唆が得られるはずであると述べている（永井他 2004, 87）。利用し

やすさが欠け、相談件数が少ないままになると、相談員にとってマイナスの影響を与える。待機する時間が長いことはピア・サポーターの意欲を減退させてしまうのである。内野はピア・サポートの課題として「相談が常時あるわけではなく、待機する時間ばかりが長いことや活動の成果が実感しにくいこと」などによって「活動に対する不全感が募り、意欲が低下することがあった」と述べている（内野 2006, 23）。この点からも、相談しやすさの向上が望まれている。

次に考えられるのは、ピア・サポーターの経験の継承である。立命館大学の岡田は、同大学の取り組みを振り返り、「基本的に 4 年でスタッフの学生が入れ替わり、スキルや経験の継承はなかなか難しい」と指摘している（岡田 2008, 51）。立命館大学においては学部学生がピア・サポーターとなっているため 4 年間であるが、大学院学生をピア・サポーターとして採用する場合、さらに短い期間でピア・サポーターが入れ替わることもある。愛媛大学の山内は同学のスタディ・ヘルプ・デスク（SHD）という取り組みについて、「アドバイザーが大学院生であるため毎年アドバイザーの顔ぶれが変化する。これに伴ってそれまで頻繁に SHD に来ていた学生が来なくなるというケースがある」と述べている（山内 2008, 52）。山内はこの課題に対処するための方法としてピア・サポーター間の連絡を密にすることを挙げているが、これだけで十分に対処できるとは考えにくい。これを改善するために必要だと考えられているのが、教職員が学生を指導するということである。

愛媛大学の佐藤は、「学生による学生支援は、学生だけに任せていてはうまく機能しない。サークル活動や授業とは異なる、教職員による教育・指導が必要となる」と指摘している（佐藤 2005a, 31）。現在行われているピア・サポート活動の多くは、佐藤と同じような考え方に基づいているだろう。しかしながら、はっきりとそのことを意識したうえで運営されている活動は少ないのではないだろうか。考えられていたとしても、実際の運営面に活かされていることはあまり多くないように思える。たとえばガイドラインを作成した秋田大学の事例でも、「現状のガイドラインはあくまで『ピアサポーター』のためのガイドラインで、これに関わる教職員が活用することを想定して作成したものではない」ということが問題点として挙げられている（細川 2008, 8）。この点に関して細川は、「教職員とピアサポーターが共有できるようなガイドラインを作成することによって、コラボレーションが成立することが期待される」と述べている（Ibid.）。

2 － 4. 先行研究の検討から

以上みてきたように、ピア･サポート活動に関しては、諸大学の活動をレビューし、日本におけるピア・サポート活動の傾向を把握したり、ピア・サポートの意義を確認したりしようとする研究が行われてきている。複数の事例を概観したことで、それらに共通してみられる実際の成果や、ピア・サポート活動に期待されることがまとめられた意義は大きい。しかしながら、ピア・サポートの範囲は非常に広いため、支援内容や役割を限定した上での事例の整理も必要であろう。特に学習面についてのピア・サポートの検討については、検討の余地が大きいように思える。それは、後に述べるように、多くの事例では「ピア」の意義が十分に発揮できていないように思えるからである。

学習支援についてのピア・サポートは、特定の教科について得意な生徒が仲間を支援することだと考えられている（西山 2001）。後に見る通り、国内の大学における多くの事例はこの考えに基づくものが多い。しかしながら、「知っていることを教える」という態度に留まることは「ピア」の可能性を著しく狭める恐れがある。多くの研究や報告では、学部学生が相談員を行うものも、大学院が相談を行うものも、全てピアとしてひとくくりにしてしまっている。また、相談に応ずる分野の区分けがなされていないことも多い。

そこで次節では、各大学のピア・サポートに関する報告書やウェブサイトを参照し､それらの試みを概観する。これらの学生による学生相談の取り組みを検討するにあたって、相談員が大学院生中心か学部生も含まれるか、科目を限定したものかより広い範囲の相談を受け付けているか、という基準によって四通りに分類した。ここではこれらの分類に従って事例を概観していく。

3. 国内の大学におけるピア・サポート活動の検証

3－1. 大学院生が特定の科目（分野）の相談にのるもの

山口大学理学部では、「物理の寺子屋」、数理学習相談室「茗茶房」、化学学習相談室「化学のオアシス」など、分野ごとの相談室を各学科が設けている。ここでは「院生が中心となって新入生や学部学生に対し、授業でわからないところや履修相談、卒論などについてきめ細かな学習指導が行われている」（山口大学大学教育機構・山口大学教育職員能力開発（FD）委員会 2006, 105）。相談員の中心は大学院生であり、ウェブサイトには質問や学習の相談が気軽にできるということがアピールされている（山口大学理学部 2011）。このようなアピールもあってか、「年間 300 ～ 500 人余りの相談があり、学習理解度や意欲の向上に貢献している」という（Ibid.）。学生の質問や相談の多くは、講義内容の不明点や勉強の仕方などであった。相談員となる大学院生には、ティーチング・アシスタント（TA）経費が支給されるよう、支援体制もとられている。この取り組みで注目すべきは、相談室に従事する相談員の数である。数理学科では、「学習相談室には、大学院生が相談員（5、6 人）として従事し、対応が付かない場合に備えて教員が 1 人別室で待機している」（Ibid., 106）。相談員を一人にしないことで、相談員は余裕をもった対応ができるであろう。また、学科ごとに設置されているということで、専門性の高い学習相談になっているということも指摘できる。

また、千葉大学では数学、化学、物理、文系学習相談、といった形で相談の領域を分け、学習相談を行っている（千葉大学図書館 2013）。そのほか、徳島大学でも工学部の学生を対象とした学習相談の取り組みが行われている（徳島大学工学部 2008）。

3－2. 学部生が中心となって特定の科目（分野）の相談にのるもの

3 － 1 の例は両方とも大学院生が相談員を行うものであるが、学部生が相談員として活躍する例もみられる。創価大学では、学生に対して英語の自主学習に関するアドバイスを行うことを目的として英語学習相談室（English Consultation Room）を設置している（創価大学 2013）。ここでは英語の学習法だけでなく、学習相談室が設置されている同大学ワールドランゲージセンターの施設の活用法や学習計画の立て方などを紹介している。相談を受けるのはトレーニングを受けたアドバイザーであるが、大学院生だけでなく 3 年生以上の学部生も応募資格を持つ。ただし、「TOEFLiBT81、ITP550 又は TOEIC800 以上」を修得していることが条件として加えられている（創価大学 2010）。

また、東京理科大学が開設している学習相談室は「数学関係の授業内容や学習方法などについての疑問」について「2 年生以上の上級生 ES（教育支援学生スタッフ Educational Supporter）」が指導するという制度である（東京理科大学経営学部 2012）。相談について事前の申し込みは不要で、1 年生なら誰でも、神楽坂・九段・野田・久喜のどのキャンパスの相談室も利用可能となっている。ES は、「学部 2 年生以上から選抜された学生で組織され、全員が専門研修を受けて」いるという（東京理科大学教育開発センター ES スタッフ 2012）。

二つの事例を見てみると、学部学生に欠けている経験を補うためか、研修が重視されている点が共通している。また、学部学生が特定分野の相談に乗る事例はあまり数が多くないということも指摘できる。どちらかといえば 3 － 1 で見たような、大学院生が中心となって相談を受ける事例の方が多い。

3－3. 大学院生が学習に関する広範な相談を受ける事例

明治大学では 2005 年度後期から、学生の学習意欲の喚起と資質の向上を図るため、各キャンパスに「学習支援室」を開設し，学習支援の具体的取り組みを始めた。ここでは助手及び TA（現役の大学院生）による学習相談、レポート作成指導、論文指導、進学相談等を行っている。この活動の結果、各学習支援室において利用する学生が増加し、「特に大学の授業に途惑っている 1 年生にとっては心の拠り所となり、学生にとっては必要不可欠な存在となって」いるという（明治大学学習支援推進委員会 2010, 1）。ウェブサイトには「授業についていけない・レポートの書き方が分からない・進路について迷っているなど、学習面で相談や不安がある方は学習支援室

へ来て下さい」とあり、広範な相談を受け付けていることがわかる（明治大学 2012）。ただし、広範な相談を受け付けつつも、専門分化も行われている。学習支援室は二つのキャンパスに合計三つあり、和泉学習支援室では語学基礎科目を中心に相談に応じ、生田学習支援室は理工学部と農学部とに分かれそれぞれの学部に関連した問題を中心に相談に応じている。広く学習の仕方について相談を受けつつも、相談を受けるのが各専門分野の先輩であることで、専門性の高いアドバイスを得ることも可能にしていると考えられる。

愛媛大学では、2005 年度に大学院生を中心とする「スタディ・ヘルプ・デスク」を開設し、学部学生に対するチューター的活動を展開している。具体的には「1、2 年次生を対象とした学習相談窓口として、大学院学生スタッフが平日午後に 2 人程度常駐し、数学、化学などの基礎科目、レポートの書き方などの助言を行っている」（愛媛大学 2008, 36）。そのほか、進学や留学、各種検定試験についても相談に応じている（愛媛大学 2012）。利用実績は「平成 17 年度約 200 人, 平成 18 年度約 300 人, 平成 19 年度約 250 人」であった。また、大学院生のアドバイザーとしての能力を高めるために、TA 業務を行う上で必要となるコミュニケーションやインストラクションのスキルを学ぶ 1 泊 2 日の TA 教育ワークショップを開催している。このような大学院生向けの研修要素も愛媛大学の取り組みの特徴といえるが、もう一点大きな特徴が、図書館との連携である。スタディ・ヘルプ・デスクは図書館の入り口付近に設置されており、図書館との連携が視野に入れられている。スタディ・ヘルプ・デスクには図書館職員も配置されており、情報検索、収集方法についての指導にも対応している（佐藤 2005b, 3）。学内の資源を有効活用しているともいえる。また、スタディ・ヘルプ・デスク設置にあたって同大学の佐藤浩章は次のように述べている。「図書館に、スタディ・ヘルプ・デスクができるということは大変意味あることである。なぜならば、図書館は「知を集積し、創出する場所」である大学を象徴する場であり、その入り口に、学習を導くスタディ・ヘルプ・デスクがあることは、いかに本学が学習を大切にしているかを示すことになるからである」（Ibid.）。スタディ・ヘルプ・デスクを図書館棟に設置することで、図書館を学生にとっての学習の拠点にすることが可能となるといえよう。

このほか、東京経済大学、いわき明星大学、摂南大学、法政大学でも、大学院生を学習相談員とした学習相談の取り組みを行っている（東京経済大学 2011; いわき明星大学 2012; 摂南大学学習支援センター 2012; 大学プレスセンター 2009）。同志社大学の「ぴあメンター」は学部 4 年生・大学院生が相談を受けているが、これも大学院生中心のものとして、こちらに分類することができよう（同志社大学 2012; 山田 2005）。大学院生が中心となって学習に関する広範な相談にのるという事例は、本節の 4 つの分類の中で最も数が多いと考えられる。

3－4. 学部生が中心となって学習に関する広範な相談を受ける事例

立命館大学では、1970 年代に学生の自治組織によって新入生を支援するオリエンテーションコーディネーターもしくはオリエンテーションコンダクターと呼ばれる通称「オリター」が組織され、ピア・サポート活動が行われてきた（勝山 2009, 28）。しかし、1980 年代から 1990 年代の初めの時期には、「学生自治会の力量ダウンもあって、オリター活動は、形骸化の度を強めていた」という（藤岡 2002, 128）。そこで大学当局と自治会とが話し合いを重ね、「オリターのありかたを学生自治会任せにせず、大学としてもきちんと位置づけ、制度的支援を行う。そのかわりにオリター制度の運用にあたっては、自治会としても開放性・透明性・専門性・無私の奉仕性（ボランティア性）を強化してもらう」という方針が定められた（Ibid.）。その後オリター組織は高い組織率を維持し、2009 年度には約 8000 人の新入生に対して全学部あわせて 776 名がオリターに登録している。オリターの行うサポートは、学習・生活・自治の三つの側面であり、履修の方法や資料検索、レジュメ作成の方法などを教えるほか、仲間づくりや時間管理、クラス運営の支援まで、多種多様の活動が含まれている（勝山 2009, 28）。既存の自治会の位置づけを大学が確認し、お互いが協力することで多様な支援が可能となっているという点に立命館大学の取り組みの大きな特徴がある。また、相談内容を学習面に絞らず、生活や自治の面

をも含むことによって、学習相談への敷居を低くしていると考えることもできよう。

その他、立命館大学の取り組みの特徴には、オリターへの教育・研修が充実しているということがある。「オリター教育・研修は、オリターが独自に実施するものの他、学部、学生部、その他関連部課が連携し、オリターのニーズにあわせて取り組んでいる」（松井 2010, 45）。このような教育や研修の重視は3 － 2と同様である。また、他の大学で行われている学部学生による学習相談の取り組みでも、教育や研修は重視されている。東京工業大学では「大学の学生相談体制、事務窓口、心のケアに関する基礎知識等の必要な研修」が義務付けられている（東京工業大学 2011）。また、秋田大学では、「ガイドラインを作成することにより活動の目的と水準を整理し、研修内容と活動の評価に結び付けることができた」という（細川 2008, 7）。大学院生が相談員を行う事例に比べ、学部学生が相談員を行う事例の方が、教育や研修が重視されているようである。

ただし､3 － 1に比べて3 － 2の数が少なかったように、学習に関する広範な相談を受ける事例も、大学院生中心のものに比べて学部学生中心のものが少ない。

	特定分野の相談	広範な分野の相談
相談員は大学院生が中心	・大学院生の研究能力や専門性を活用 （例） 山口大学理学部の「物理の寺子屋」 千葉大学の学習相談 ・事例は比較的多い	・大学院生の研究能力や専門性を活用 （例） 明治大学の学習支援室 愛媛大学の「スタディ・ヘルプ・デスク」 ・事例は比較的多い
学部学生が中心	・事例は比較的少ない	・生活面での相談に対応することも （例） 立命館大学のオリター ・事例は比較的少ない

3 － 5. 4つの分類によって見えてきたこと

上記の4分類は明確なものではなく、分類が難しい事例もある。しかしながら、おおまかに4つに分類したことによって、ピア・サポーターの属性および研修制度について、ある傾向がみられた。それは、相談員の知識や経験の乏しさをどうにかして補おうとする態度である。ピア・サポーター（被援助者と同じような立場に立って援助を行うもの）という言葉を厳密にとらえるならば、学部生に対しては学部生が相談に応ずるのがよいということになる。しかし、さまざまな事例を見てみると、必ずしも学部生が中心となっているわけではない。特に学習面への支援に関しては、大学院生が相談にのるという事例が多い。一方、学部生がピア・サポーターを担当する事例では、十分な研修が必要とされている。

この状況をどのように考えるべきか｡考えられるのは、大学院生に対する信頼と、学部学生の知識や経験の乏しさに対する不安である。

大学院生が相談を行うことについては、多くの報告書やウェブサイトにおいて、その専門性への信頼が見られる。3 － 1で検討した例では専門分野についての信頼が見られるし、3 － 3で検討した例では専門分野に限らず大学院生の研究者としての経験への信頼が見られる。そのため、不特定多数の科目についての相談も行われることになる。広く相談を受ける場合にも、比較的狭い専門領域での相談を受ける場合にも、研究者の卵としての大学院生の研究能力が評価されているのである。教職員よりは学生に近いが、学生よりは知識や経験を持った存在としての大学院生の価値が発揮されることになる。

しかし、この場合、相談活動は同じ立場の人間の間で行われるというよりは、先輩から後輩へという形で行われる。相談者と相談員の間に立場の違いが存在することになるのである。

これに対して学部学生が相談を行う場合、大学院生中心の相談とは異なった戦略が見られる。まず、3 － 2で見たような、領域を限定する場合である。これは、領域を限定し、特定の試験での成績を証明させるないしは入念に研修を行うことによって、相談員の質の保証を行っていると考えらえる。また、相談員側から見れば、相談領域が限定されることによって、相談活動のための学びなおしが効率的に行われることにもつながるだろう。一方で3 － 4のように相談を幅広く行う場合には、生活面を重視して身近さを強く押し出し、そこから学習面での相談につなげようとしているものが多い。従来ハードルの高かった学習面での相談を利用しやすくするために、小さ

なステップを作り出しているのである。そのため、特定の科目にかかわる相談は中心的なものとはされていない。

このように考えると、学部学生が相談員を行う場合、不特定多数の科目にかかわる相談を受けることは避けられる傾向にあると言ってよいだろう。相談しやすさを考えれば学部学生起用に利があるものの、それ以外の点については不安が残るのである。学部学生が相談員を勤める場合、知識や経験の乏しさを補ったり、範囲を限定したりといった対処が必要であるという認識が広く共有されているといえよう。知識や経験の乏しさが問題になることには、「本来であれば知識の豊かな人間を相談員に充てたい」という考え方が見て取れる。

相談内容の限定や研修は、たしかに学習相談の質保障を考える上では重要な要素である。しかしながら、ここには「ピア」であることの意義を弱めてしまう危険性も潜んでいる。では、この状況にどう対処していくべきか。そのためには、「ピア」であることの意義をさらに検討することが必要であろう。もちろん、学生相談員の学び直しやそこで身につけるソーシャル・スキルに意味はある。学生の目線に近い相談員がいることにも大きな意味があろう。しかし、知識や経験の乏しさを欠点として見る態度が残った状況では、これらの意義も十全には発揮されないように思える。知識や経験の乏しさを欠点として見るのではなく、学部学生がもつ利点として見る態度が必要なのではないだろうか。そしてそのことによってこそ、学びあう関係の形成が可能となるのではないか。これらの点について、学習相談アワーの取り組みは重要な検討材料を与えることができると考えられる。

4. 学習相談アワーの特徴と示唆

以上のような国内諸機関の取り組みを勘案したうえで慶應義塾大学日吉キャンパスにおける学習相談アワーの特徴をあげるならば、以下 3 点となる。すなわち、1. 学部学生が相談員の中心である点、2. 教職員、特に図書館のリファレンススタッフとの連携が密である点、3. 相談の経験を生かした展示企画や公開講座を行う点である。

4 － 1. 学部学生が相談を受けること

前節で確認したとおり、学問的領域についてのピア・サポートは、大学院生が活動の中心を担ったり、学部学生が相談員を務める場合、分野を限定したりするのが一般的である。このような方法は、相談についての質を担保するためには保証をもたらす点で大いに有用であろう。しかしながら、学部学生に広範な相談を任せることはデメリットばかりかというとそうではない。相談しやすい、相談者の目線に近い、ということは他の研究や実践報告でも指摘されているが、それ以上に、相談員が相談者に対して積極的に問いを投げかけることによるメリットに着目すべきである。

学習相談アワーは、専門分野についての相談に応じるものではなく、レポートの書き方、大学での学習の仕方などについての相談に応じるものである。学習相談アワーが行われている慶應義塾大学日吉キャンパスは文・医・薬学部の 1 年生と経済・法・商・理工学部の 1・2 年生が学ぶ場であり、いわゆる一般教養科目を学ぶ場として位置づけられている。そのため、レポートに関する相談でも多様な科目の相談が集まり、相談員自身よりも相談者の方が、相談内容についてよく知っているということは頻繁に起こる。その場合、相談員は対処できないのかというとそうではない。相談員はまず相談者の問題について積極的に聞き出すことで、相談に応える。レポートの課題はどんなものか、それまでどんな授業が行われているのか、相談者はどのようなテーマでレポートを書こうとしているのか、などを、丁寧に聞き出す。その中で適宜レポートや論文の型を提示しつつ、その型に自分の考えをあてはめるにはどうしたらよいかということを相談者に考えさせていくのである。

このような方法とはまず、相談者にとって有益である。相談者は何が問題なのか、自分がどこで躓いているのかということに気づいていないことが多い。そのような状況にあるとき、相談員に自分の状況を説明することで、自分が直面している問題が何なのか見やすくなってくる。人によってはここまでできれば後は自分で解決できる。

問いかけを中心とした学習相談は、相談員自身にとっても有益である。人はどうしても教えたがる。使命感に燃えていればなおのことそうなる。実際に、新たに学習相談員になった学生は「しっかり教えなければ」と感じ

ていることが多い。その使命感は大切であるが、それが行きすぎ、「自分が知っていることを知らない人に教える」という態度が支配的になると、逆に「知らなければ答えられない、力になれない」という態度をも導きかねない。そうなった場合、相談活動は大きな問題をはらむことになる。大学で身につけられるべきことの一つとして批判的思考が挙げられるが、このような態度は批判的思考から最も遠い事大主義的態度に陥ってしまうからである。これは学問に臨む態度ではない。

相談員は、自分の専門でない領域のことについては、必然的に相談者に聞かざるを得ない。もちろんその場合でも、指導するということが完全になくなるわけではない。レポートや論文の基本的な型のようなものは確かに存在するし、その型について相談員は相談者よりも習熟している。教えるべきことは確かにある。具体的な課題とは関係なく、基本的なレポートの書き方のみをレクチャーするという対処法もあり得るかもしれない。しかし、レポートの書き方は具体的な課題に即して説明されなければどうしても伝わりにくい。したがって、課題について触れざるを得ず、相談活動の中でレポート課題について相談者に聞くことは必須の手続きとなる。そう考えれば、自分の知らない領域、分野のことについて、レポートや論文のルールに沿ってアドバイスを行うことこそが、学習相談員の主たる任務であり、相談員は相談活動を通して、聞き出す技術と態度を身につけことが求められることになる。レポートの書き方について壁にぶち当たった学生からの相談を受けた相談員は、実際の課題にどのように取り組むかということを相談者に押しつけない。レポートや論文を書く上での一般則に基づいて、相談者自身の知識と思考を聞き出しながらそれを整理することを援助する。相談者の考えをその型に当てはめるにはどうしたらよいかということを、一緒に考えていくのである。このとき、当該の課題についての知識の少なさは、むしろ相談活動を行う上での利点として働くのである。

学習相談アワーが始まった当初、相談員の間ではいかに相談に対応するかということが中心的に考えられた。多様な領域に対応できるように相談員の数を増やし対応できる学部・学科を揃えることも考えられた（慶應義塾大学教養研究センター 2010, 46）。相談の種類をある程度パターン化して対応へのマニュアルを作ることや、自分の専門外の相談についてはその分野を学ぶ別の担当に回すということも考えられた。しかし、これらがいきすぎるとピアであることの利点が失われてしまう。知識の少ない学生を相談員とすることに「妥協」するために、マニュアルを整備しようと考えるのであれば、そこには自ら限界が生ずる。ピアであることの意義を考えるためにも、2 年生を含む学部学生が相談員の中心となっているということを、より積極的に捉えるべきである。

壁にぶつかった者に対して、問題について積極的に聞き出し、その知識を整理させ問題の所在や解決への道筋を彼自身に気づかせるという行為は、実はゼミや研究会、学会で当然のごとく行われているが、いまだゼミなどの学問サークルに属しておらず、大教室での講義を履修することが多い日吉キャンパスの学生にとっては縁遠いものである。しかし、このような学生間の学びの連携は大学院生や学部上級生にだけ独占されるべきものではない。学習相談は、積極的に学び合う関係の構築を助けることができるだろう。もちろん、学習相談が改善できるのは学内のごく一部であるが、学びあいの関係をつくる触媒の役割を、学習相談アワーは担うことが期待できる。

4 － 2. 教職員と学生の協働

学習相談アワーは、教養研究センター、日吉メディアセンター、学生の 3 者協働の取り組みである。教養研究センターおよび日吉メディアセンターの主な役割は以下の通りであるが、3 者の連携はいくつかの利点をもたらしている。

まず、教養研究センターとの連携により、相談員が確保されることが挙げられる。学習相談員は基本的に教養研究センター設置科目『アカデミック・スキルズ』の修了者から選出される。教員が 1 年間指導した学生の中から相談員を選ぶことができるので、質の保障はこの時点である程度達成されると考えられる。また、相談員から教養研究センターに対しては、教育改善のためのデータや資料を提供することができる。教員と相談員との関係を見ても、一方的な知識の伝達に限定されない、双方向的な関係が実現されている。

教養研究センター、日吉メディアセンターの主な役割

①教養研究センターの主な役割

1. 学習相談員の人選を行う
2. 学習相談アワーのねらいと成果を教員に広報し協力を仰ぐ
3. 教員の立場から学習相談員にアドバイスと提案を行う
4. 大学教育の改善のために活動の成果を反映させていくための基盤整備をする

②メディアセンターの主な役割

1. 学習相談アワーの場として、レファレンスデスクを提供し、必要な資料・設備を整える
2. 学習相談員のスケジュール調整を行う
3. 学習相談アワーに先立って学習相談員の指導を行う
4. 学習相談員の相談業務をサポートする
5. 成果とのとりまとめを行う

また、メディアセンター職員、特にリファレンスデスクのスタッフとの連携も重要である。学習相談アワーのデスクはリファレンスデスクの隣に設置されており、相談の際、相互に連携しあうことが可能である。

資料が見つからないという相談には、基本的にリファレンススタッフが対応する。しかし、そのような相談の本質が、「資料が見つからないこと」ではないことも少なくない。そのために、具体的資料が特定できないまま、あまりに限定された範囲の資料の所在をレファレンススタッフに聞くということがしばしば起こる。また、求めているのがアクセスしにくい資料であったり言語の問題で読解できない資料であったりという場合も多い。このような場合、相談者は資料を読んでも問題が解決できない、あるいはせっかく手に入れた資料も読解をあきらめざるをえないということになる。相談内容の奥にあった根本の問題は解決されないままになってしまうのである。

このとき、レファレンススタッフと連携した学習相談員が、相談者に寄り添って、課題について聞き出すことによって、問題を解決することが期待できる。相談員が、取り組んでいるのがどのような課題なのか、どのような論立てをしようとし、そのためにどのような資料を探そうとしているのか聞き出すことによって、無理のある資料検索から、より実効性の高い資料検索へと移行することができる。そして資料の候補があがったところで、改めてリファレンススタッフに資料検索の依頼をすればよい。レポートを書く場合、資料収集と論立てとは必ずしも一方向的な段階としてあるわけではない。収集した資料によって論が変わることもあるし、論が変化したためにあらためて資料収集が必要になることもある。リファレンススタッフと学習相談員の協力関係は、この往復運動を相談者に提供できるのである。このとき、学習相談員はリファレンススタッフに学び、リファレンススタッフは学習相談員に学ぶという関係が構築されることになる。

4－3. 相談の成果の公表

最後に日吉学習相談の特徴としてもう一つ、相談の成果の公表をあげたい。相談員が展示等の企画を行うということは、国内の他の事例でも散見されるが[5]、相談内容に関連させたものはあまり多くないようである。また、学習面での相談員が展示等の活動を行うということも、少なくとも報告書や論文にはあまり見られない。しかし、学習面の相談をまとめて学生の躓きやすい点を整理し、相談に来ない一般学生のために役立つように公表することは可能である。愛媛大学では相談内容を集積し分析することで大学運営に役立てようとしていたが、それだけでなく、より直接的に学生の役に立てることも可能であろう。

学習相談アワーの相談員は、相談内容をもとにした企画展示や公開講座を行っている。これらは、もともとは相談が来ない時間を有効活用するための手段として考えられたものだったが、相談の宣伝効果としても有効であることがわかり、学習相談アワーの重要な仕事として考えられるようになった。特に展示企画は学習相談アワーの開始年から定期的に行われ、回数を重ねている。

では、このような相談の成果の公表にどのような意義があるだろうか。まず、相談員の成長とその自覚があげられる。展示企画や公開講座を行う際、相談員はそれまでの相談内容を明確に言語化・図式化することに迫られる。これによって、相談員は自らの知識や経験を整理することができるのである。また、学習相談員の経験の継承にも大きな意味を持つ。ほんの数年で入れ替わってし

まう相談員にとって、展示企画や公開講座の資料は学ぶべき大きな財産である。

そしてもうひとつ、学生の悩みを個人のもので終わらせてしまわないということがあげられる。相談員は個別の学習相談を行うが、相談の経験を蓄積する中で、学生の悩みにいくつかの傾向が見られることに気づいた。学習相談アワーは、これらの学生の悩みの傾向に基づいて、企画展示や公開講座を実施している。学生から学業に関する悩みを聞き出し蓄積し、そしてそれを企画展示や公開講座によって一般化する。その中で、学習上の悩みでを学生全体で共有することを目指す。学習相談アワーは個別の学生の相談を解決するにとどまらないのである。個別相談を個別相談に終わらせないことが、学習相談アワーのもう一つの特徴であるといえよう。

5. 学習相談アワーの課題と発展の可能性

5 － 1. 学習相談アワーの課題

上記のようにさまざまな特徴を持つ学習相談アワーの取り組みは、他大学のピア・サポート活動にも資すると考えられる。しかしながら、学習相談アワーも問題なく運営されているわけではない。最後に学習相談アワーの課題を提示し、ピア・サポート活動の今後を展望するための材料としたい。

まず、2 節で検討したピア・サポート一般の課題は、学習相談アワーにも当てはまる。量的拡大、質的向上は常につきまとう問題である。特に広報や教員との連携の問題は重要である。展示企画や公開講座によって認知が拡大してきているものの、相談者が学習相談アワーを知ったきっかけとして一番多いのは科目担当者の推薦である。科目担当教員との連携は、今後も積極的に模索されていく必要がある。

また、経験の継承および研修という問題もある。前項で述べたとおり、企画展示等によって経験の継承がなされやすい環境は構築されつつあるが、それでも週に 1 回デスクに入るだけで相談の経験が十分に積めるのかという点については疑問が残る。初任者の研修については、現時点では先輩相談員の相談を見学したり、オンジョブ・トレーニングを行ったりといった形で行われている。しかし、多様な相談事例を見る前に「習うより慣れろ」に近い状態で相談に挑んでいるのが実状である。相談の様子を映像や音声に残すことができればそれを見て学ぶということも考えられるが、個人情報保護の観点からいって難しい。相談員によるロールプレイも検討されているが、この点は今後の課題である。

また、2 節で論じなかった点で重要な点としては、相談員相互の関係づくりがあげられる。慶應義塾大学独特の困難として、相談員相互で連携がとりにくい条件がある。日吉キャンパスには主に 1・2 年生の科目が開講されているのだが、相談員の中心である 3・4 年生と文学部の 2 年生以上は三田や矢上といった別のキャンパスに所属している。相談員の多くは相談の行われている日吉キャンパスを生活の場としていないため、日吉キャンパスで頻繁にミーティングを行うことは困難である。相談員は主に表計算ソフトを用いた連絡帳およびメーリングリストによって情報共有をはかっているが、対面での関係はまだ十分ではない。従来学期に 1 回行われていた全体反省会に加え、月に 1 回程度のミーティングを三田キャンパスにおいて行うようにしているが、それでも相談員相互の関係を密にするには不十分である。連携が十分にとれない場合、経験の共有も困難となる。この点については、各キャンパスでのミーティングを定例化するなどの解決策を模索していかなければならない。

最後にもう一つ、学習相談アワーの課題として、他の学習相談の取り組みと連携をとることがあげられよう。学習相談アワーの取り組みは本年度で 6 年目であるが、これまでは土台を整備する時期と位置づけ、どのように相談に対応していけばよいかということを模索していた。新しい取り組みを成功させることに腐心する中で、国内他機関の蓄積についての研究が十分に行われなかった部分がある。上でも述べたようにここ数年でピア・サポートの取り組みは確実に広まってきている。それらの取り組みに学び、また、連携していく必要があろう。

また、本報告書にある通り、2012 年度、慶應義塾では学内の各キャンパスで別々に行われていた学習面でのピア・サポート活動の会議が開かれ、今後各取り組みの運営者間で連携していくことが確認された。今後はこのような連携を積極的に行っていく必要があろう。その中に、学習相談アワー発展の可能性を見出すことができる。

連携によって質を高めるとともに、学習相談アワーの役割がより鮮明なものとなりうる。

5－2. 学内における学習相談活動連携の可能性

本報告書にあるとおり、慶應義塾大学では日吉キャンパスの学習相談アワーの他にも、各キャンパスにおいて学生による学習相談の取り組みが行われている。理工学部の相談に特化し専門知識の相談・生活相談など多様な専攻の相談にこたえるS-Circle、および学部学生の相談にとどまらず修士論文や学会発表の相談まで高度で幅広い相談を受ける湘南藤沢キャンパスのWriting & Research Consultant（以下WRC）がそれである。それぞれが独自に成り立ち、独自の発展を遂げている。

その発展の仕方には、各キャンパスの特徴が反映されている。学習相談アワーが行われる日吉キャンパスには主に学部1･2年生が所属しているため、学習相談アワーは基礎的な相談を多く受け付けることとなる。S-Circleの行われる矢上キャンパスには理工学部の3・4年生と大学院生が所属しており、学部は13学科に分かれている。そのため、S-Circleは多様な学科の学生スタッフを擁し、各スタッフがそれぞれの体験に基づいたアドバイスを行っている。そしてWRCの行われる湘南藤沢キャンパスは、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部の1～4年生と大学院生が所属する。そのため、大学1年生から大学院生まで広い範囲の相談を受け付けることとなる。

では、これらの学習相談活動が連携することで、どのような優位性が望まれるか。まず考えられるのは、実際上の利点である。3者の意見交換によって､それぞれ違った角度からの指摘を得ることができる。また、相談のための知識や情報、ツールを共有し、より質の高い相談体制を確立することもできよう。

さらに、それ以上に期待されることとして、相談活動の一貫性が挙げられる。たとえば、学習相談アワーとS-Circleとの連携によって、相談に対する応答の発展と一貫性とを検討することができる。専攻別の学習が本格化する3・4年生の段階で多く寄せられる相談について学習相談アワーの相談員が知っていれば、先を見据えた応答が可能となってくる。逆に多くの1・2年生が躓きやすい点についてS-Circleの相談員が知っていれば、相談者の躓きが専門段階に原因があるのかより基本的な段階に原因があるのか考えやすくなるだろう。そのほか、S-Circleの相談員が自然科学分野に特化したレポートの書き方講座や企画展示を日吉で行うということも考えられる。また、現状学部4年生や大学院生の相談を多く受けるWRCが､1･2年生の相談に特化した学習相談アワーに学ぶことによって、1・2年生から大学院生までの学習上の進展を想定した相談対応を行うこともできよう。

そして、3者の連携によって最終的に考えられるのは、慶應義塾全体のピア・サポート体制の確立である。3つの取り組みは今まで草の根的に運営され、それぞれがばらばらに存在していた。小回りは利くが、それぞれの取り組みどうしの関係や、大学教育全体との関係が不明瞭となっている。3者の連携の進展によって、慶應義塾大学というより大きな文脈の中にピア・サポートの活動をより明確に位置づけていくこともできよう。

ただし、連携を進めてピア・サポートのシステムを構築しようとした場合、単に学習相談を行っているという点だけを取り出してまとめればよいわけではない。基盤となる考え方の共有が必要となってくるだろう。この点を、次項で検討したい。

5－3.「半学半教」の関係づくりと日吉学習相談アワーの役割

ピア・サポートのシステムを構築しようとした場合、考えられるべきは3者の共通点であり、共通の理念である。今後のピア・サポート活動を考えた場合、どこまで支援するのか、そして支援した先に何を期待するのかということが十分に検討されていなければならない。「なぜピア・サポートが必要なのか」ということについての共通認識が各取り組みの中に必要であろう。一つの大学の中に複数の学習相談の取り組みがある場合、それらの関係や、全体としての意味づけについても検討がなされる必要がある。

このとき、共通の理念として考えられるのが「半学半教」である。本書が報告しているセミナーのまとめでは、S-Circle、WRC、そして学習相談アワーに共通するものとして、相談者から聞き出す態度を重視してい

る点があり、そしてそれは「半学半教」という慶應義塾の教育理念を具現化したものだと言う指摘がコメンテーターよりなされた。「半学半教」とは、教員も学生も共に学び共に教える立場にあるのだという考え方のことを指す[6]。この考えの根幹には、福澤諭吉が好んで用いた「愈究而愈遠（いよいよきわめていよいよ遠し）」という言葉に見られる思想が潜んでいると言われる。学問に完成はなく、教員も学生も共に学び共に教える立場にあるという考え方である（慶應義塾史事典編集委員会 2008, 414-415）。また、「慶應義塾社中之約束」には「師弟ノ分ヲ定メス教ル者モ学フ者モ概シテコレヲ社中ト唱フルナリ」とある（佐志・慶應義塾福澤研究センター 1986, 3）。慶應義塾に集ったものは、皆学ぼうとする点で平等なのである。学習相談の取り組みは、相談者が相談員から学ぶとともに、相談員も相談者に学ぼうとするものであり、その意味で「半学半教」を実践するものであると言えよう。

教える―教えられる、という一方的な関係を問い直すことは、大学における学びを充実したものにするために大きな役割を果たす。「半学半教」の考えを共有したピア・サポートのシステムが成立することで、学生の大学での学びへの移行はよりスムーズなものとなるのではないだろうか。また、「半学半教」の理念に基づく学習相談の取り組みは、「大学における学び」に対する共通意識を形成するのに役立つと考えられる。日吉キャンパスは 1・2 年生にとっての一般教養の場、矢上キャンパスは理工学部の場、湘南藤沢キャンパスはより実践的な志向をもつ、と一般的に考えられている。そこに属する学生の思考や学びも、それぞれに特徴的なものとなっていると考えられる。しかし、「半学半教」という理念を基盤とする学習相談の取り組みが共有されれば、各キャンパスの垣根を超えて、「大学における学び」の共通像を構築することも可能であろう。

このとき、改めて日吉学習相談アワーの役割を考えるならば、知識や経験の乏しさを利点として許容する学習面でのコミュニティ創造にあると考えられる。本稿では、国内の学習面でのピア・サポート活動の事例を整理したうえで、学習相談アワーの特徴を明らかにしてきた。学習相談アワーは、学部生を相談員の中心することによって知識や経験の乏しさに積極的な意義を見出せる活動であると言える。また、学習相談員が教えながら学ぶというだけではなく、その経験を広め、個別相談を個別相談にとどめない仕組みを作ろうとしている点も、知的活動を中心としたコミュニティづくりに資するものである。「半学半教」の精神をもったコミュニティ創造の可能性を、学習相談アワーはもっている。

もちろん、学習相談アワーだけでコミュニティ創造は達成され得ない。「半学半教」の考え方が一部のキャンパスにとどまるものであれば、それは大学における学びを保障するものにはならない。学内全体で共有されてこそ、「半学半教」が大学教育を構築するための理念としての意味を持ってくる。この意味で、学習相談アワーは WRC や S-Circle と連携することによって、コミュニティ創造の可能性を広げることができよう。

6. おわりに

以上、日吉学習相談アワーの特徴と可能性について検討を行ってきた。学部学生が中心となって相談を行うという特徴を生かし、大学での学びに学生を導きつつ、大学内の知的な関係をつくりあげることに、学習相談アワーは資することができると考えられる。そして学内他キャンパスの取り組みとの連携によって、その関係づくりはさらに促されることが期待できる。

その際注意すべきは、5 で検討した、大学教育全体との関わりの意識である。単なる対症療法的な相談業務に終わってしまっては、ピア・サポートは形骸化しかねない。北野秋男は日本の TA 制度について、「『TA 制度による大学教育の改善』という理念が明確に大学教員に意識されない限り、TA 制度の形骸化を生む可能性が存在する」と指摘しているが（北野 2006, 187）、このことはピア・サポート活動にも当てはまるだろう。ピア・サポート活動は、その理念が明確に示されずに行われることも多い。理念的な基盤がなければ、ピア・サポート活動は一時の流行として今後衰えかねない。なぜピア・サポート活動を行うのか、ピア・サポート活動によって大学（教育）がどのように変容しようとしているのか、あるいはピア・サポート活動は大学（教育）をどのように変容させようとするものなのか。これらの点を明確にしていく

必要があるだろう。

ただし、ピア・サポート活動にはTA制度にはない利点がある。それは、意欲を持って活動を行う学生の存在である。ピア・サポート活動は、学生自身の自主的な意欲そのものが活動の主たる推進力となりうる。そしてその成果をもって、大学教育の理念そのものに対する建言を行うことも可能である。つまり、意欲を持って活動を行う学生自身の力で、活動の形骸化を防ぎ、大学教育の改善に寄与することが可能だと考えられる。TA制度に比較して、実施主体が活動の発展に対して抱くモチベーションは高い。このことからすれば、大学の学びの新たな仕組み作りのためには、ピア・サポート活動が資するところは大きいと言えよう。慶應義塾の取り組みの場合にも、「半学半教」を単なるスローガンにせず、ピア・サポート活動を支える基盤として意識していくことによって、活動を維持・発展していくことができると考えられる。

もちろん、この「半学半教」という考え方は、慶應義塾のみに限定されるべきものではない。ピア・サポートの根幹をなす考え方として、広く検討されるべきであろう。そのためにも、学習相談アワーに関する検討と議論を、他キャンパスの取り組みと協力しながら、今後も続けていく必要がある。

本稿は日吉学習相談アワーを検討課題とし、そこからキャンパス間の連携を考えた。WRCやS-Circleの独自性についての検討は不十分である。そのため、連携の具体的な形や、連携によって期待されるコミュニティの像は、明確なものとなっていない。WRC、S-Circleおよび学習相談アワーの連携については、まだ検討がはじまったばかりである。3者の特徴を分析した上で、それらをつなげ、各取り組みの役割を明示しながら、全体としてのシステムを検討していくことは、今後の課題としたい。

註

本稿は、「学びの連携」プロジェクト第4回公開セミナー（2013年3月18日、於：慶應義塾大学日吉キャンパス）において行った報告の原稿をもとに、当日いただいたご質問・ご意見に学んで改稿を行ったものである。

1）一言に「ピア・サポート」といっても論者によって定義は異なるが（西山 2004）、ここではその範囲を高等教育機関に限定し「学生による学生支援」と定義し、その中でも特に学習相談の活動を本稿の検討対象としたい。

2）「学習相談アワー」の概要については、本報告書のセミナー報告参照。

3）ただし、それぞれの取り組みが経済支援として十分なものかという点については検討が必要であろう。学習相談と似た分野では、ティーチング・アシスタント制度について、経済支援が不十分であると指摘されている。日本のティーチング・アシスタント制度について研究を行った北野秋男は、「TAの給与は家庭教師より安い」点を指摘し、「TAを将来の研究者、大学教員への第一歩とすれば、奨学金的な側面を一層充実させるべきであろう」と主張している（北野 2006, 186）。

4）たとえば、創価大学教育・学習活動支援センターの行う相談業務（坂本 2003）や、愛媛大学のスタディ・ヘルプ・デスクの取り組み（山内 2008）は、学習支援の試みを学生のニーズを把握・分析するためにも用いようとしている。

5）たとえば北海道大学では、相談員がピア・サポート室でカフェを開くという「ぴあカフェ」、不要になった本を学生から回収し主に新入生に対して配布する「本活」といった活動や、広報ビデオの作製も行っている。このような活動はピア・サポートを身近に感じてもらうことを目的として行われている（岡本 2012; 岡本 2011）

6）もともとは、学生の身分でありながら教師を兼ねる教育形態のことを指し、江戸時代から明治初年にかけての教育機関、特に経営基盤の弱い民間の私塾でよく使われていた。先生一人で塾を経営しているような小規模な私塾では、担当できる生徒の数はごく少数に限られ、入学者が増えた場合には教育の一部を生徒の中の先進者に任せなければならなかった。そのため、先輩が後輩を教える、学生が教師を兼ねるという「半学半教」のシステムが生まれたと言われる。慶應義塾の「半学半教」も、当初は財政上の理由からやむを得ずと

られたものであったが、やがて単なる教育システムでなく理念として捉えられるようになった。

参考文献

いわき明星大学. 2012.「学習相談センター」, http://www.iwakimu.ac.jp/ed/conference.html（2013年1月6日最終取得）.

内野悌司. 2006.「新入生を先輩が支援する広島大学ピア・サポート活動について」『大学と学生』（29）: 17-24.

愛媛大学. 2012.「スタディ・ヘルプ・デスク」, http://www.ehime-u.ac.jp/campus_life/guidance/consultation/detail.html?new_rec=1303（2013年1月6日最終取得）.

———. 2008.『中期目標の達成状況報告書』, http://www.ehime-u.ac.jp/upload/temp/block_12214_01.pdf（2013年1月6日最終取得）.

大石由起子. 2010.「高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待」『大学と学生』（87）: 16-21.

大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努. 2007.「ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望」『山口県立大学社会福祉学部紀要』（13）: 107-21.

大石由起子・林典子・稲永努. 2010.「大学における新入生支援としてのピアサポート活動──立ち上げの2年間をめぐる考察──」『山口県立大学学術情報』（3）: 29-44.

岡田大士. 2008.「情報リテラシー教育におけるピア・サポートの取り組み──立命館大学の13年間の活動から──」『Informatics』2（1）: 47-54.

岡本健. 2012.「つながり創出型ピア・サポートの成果と課題──ピア・サポートの積極的存在意義と活発な活動の持続に向けて──」北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会編『北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）』, 北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会, 1-26.

———. 2011.「北海道大学ピア・サポートの誕生と展開──つながり創出型ピア・サポートの提案──」北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会編『北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版）』, 北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会, 5-25.

奥山利弘. 2010.「山形大学における学生との協働による経済支援──アドミニストレイティブ・アシスタント制度──」『大学と学生』（88）: 26-30.

勝山美菜子. 2009.「学生の参加・参画による教育改革──オリター制度による学びの仕組みづくり──」『大学マネジメント』5（6）: 28-32.

川島啓二. 2010.「大学教育の革新とFDの新展開」『国立教育政策研究所紀要』（139）: 9-20.

北野秋男. 2006.『日本のティーチング・アシスタント制度──大学教育の改善と人的資源の活用──』, 東信堂.

慶應義塾史事典編集委員会. 2008.『慶應義塾史事典』慶應義塾。

慶應義塾大学教養研究センター. 2010.『図書館に展開する半学半教の場づくり──「学生の学習環境を整える」プロジェクト2008・2009活動報告書──』, 慶應義塾大学教養研究センター.

坂本辰朗. 2003.「「学生中心の大学」のための教育・学習支援──教育・学習活動支援センターの取組──」『大学と学生』（469）: 38-43.

佐志傳・慶應義塾福澤研究センター. 1986.『慶應義塾社中之約束』, 慶應義塾福澤研究センター.

佐藤浩章. 2005a.「学生支援策としてのピア・エデュケーションの可能性」『IDE』（473）: 27-31.

———. 2005b.「学習支援窓口としての「スタディ・ヘルプ・デスク」の開設」『愛媛大学附属図書館報　図書館だより』（78）: 2-3.

摂南大学学習支援センター. 2012.「教育センター（寝屋川）学習相談」http://sprite.eng-scl.setsunan.ac.jp/soudan.html（2013年1月6日最終取得）.

創価大学. 2012.「英語学習相談室 | 創価大学 ワールドランゲージセンター」, http://wlc.soka.ac.jp/index/ja/facilities/reserve-list/Counseling.html（2013年1月6日最終取得）.

———. 2010.「英語学習相談室学生アドバイザー募集！ | 創価大学 ワールドランゲージセンター」, http://wlc.soka.ac.jp/index/ja/news/n20101025.html（2013年1月6日最終取得）.

大学プレスセンター. 2009.「大学院生による学習アドバイザー制度を好評展開──法政大学図書館」, http://www.u-presscenter.jp/modules/bulletin/index.php?page=article&storyid=955（2013年1月6日最終取得）.

千葉大学図書館. 2013.「学習サポート | 千葉大学アカデミッ

ク・リンク・センター」 http://alc.chiba-u.jp/support.html.（2013年1月6日最終取得）.

東京経済大学. 2011.「個別学習相談」, http://www.tku.ac.jp/gakushu/soudan.html （2013年1月6日最終取得）.

東京工業大学. 2012 「ピアサポートサービス」, http://www.gakumu.titech.ac.jp/gakuseisien/study/peer.html （2013年1月6日最終取得）.

———. 2011.「東京工業大学ピアサポート学生相談実施要項」, http://www.somuka.titech.ac.jp/Kisoku/contents6/6-56.pdf.（2013年1月6日最終取得）.

東京理科大学教育開発センターESスタッフ. 2012.「平成24年度東京理科大学学習相談室」, http://www.sut.ac.jp/disclosure/release/pdf/gakushusodan_h24.pdf.（2013年1月6日最終取得）.

東京理科大学経営学部. 2012.「「学習相談室」で、学部1年生を上級生がサポート！」, http://www.ms.kuki.tus.ac.jp/education/learning/index.html.（2013年1月6日最終取得）.

同志社大学. 2012.「S-Cubeのプログラム（ぴあメンター）」, http://www.doshisha.ac.jp/students/s_support/s_cube/mentor/mentor.html.（2013年1月6日最終取得）.

徳島大学工学部. 2008.「学びの相談室」, http://www.tokushima-u.ac.jp/e/campus/counselling/counselling_room.html.（2013年1月6日最終取得）.

永井智・松尾直博・新井邦二郎. 2004.「大学新入生に対するピア・サポート活動の試み」『東京学芸大学紀要.第1部門, 教育科学』 （55）: 81-91.

名古屋学院大学学生支援GP推進委員会. 2010.『「多様な学生に向きあう現代の大学像──学生支援の新たなあり方を求めて──」実践報告』, 名古屋学院大学.

西山久子. 2004.「諸外国のピア・サポートの歴史と動向──学校現場での仲間支援活動の起源から現在まで──」『ピア・サポート研究』 （1）: 39-42.

日本学生支援機構. 2008.『新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集 平成19年度』, 日本学生支援機構.

藤岡惇. 2002.「先輩が後輩を導く相互学習のしくみ──立命館大学の「オリター制度」の経験──」『高等教育ジャーナル』 （10）: 127-131.

細川和仁. 2008.「初年次教育における学習ピアサポート活動」『秋田大学教養基礎教育研究年報』 （10）: 1-9.

松井かおり. 2010.「学生の学びあいが育む成長エネルギー──学習者の自立を支援する学生支援の構築にむけて──」『大学と学生』 （77）: 41-47.

明治大学. 2012.「農学部学習支援室」, http://www.meiji.ac.jp/agri/education/support.html.（2013年1月6日最終取得）.

明治大学学習支援推進委員会. 2010.『2009年度明治大学学習支援報告書』, http:// www.meiji.ac.jp/learn-s/info/2009houkokusyo.pdf（2013年1月6日最終取得）.

山内一祥. 2008.「愛媛大学における大学院生による学習支援の現状と課題」『大学教育実践ジャーナル』 （6）: 47-55.

山口大学大学教育機構・山口大学教育職員能力開発（FD）委員会. 2006.『平成17年度山口大学のFD活動』.

山口大学理学部. 2011.「相談室:困ったときには」, http://www.sci.yamaguchi-u.ac.jp/st/ywmnf5.（2013年1月6日最終取得）.

山田剛史. 2010.「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」『大学と学生』 （87）: 6-15.

山田礼子. 2005.「学生による学生の支援活動」『Between』 （214）, http://benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2005/0607/0607main.shtml.（2013年1月6日最終取得）.

慶應義塾大学教養研究センター主催
「学びの連携」プロジェクト公開セミナー

塾生による塾生のための半学半教の場作り
──慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後──

2013 年 7 月 31 日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　不破有理

〒 223-8521　横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL　045-566-1151（代表）
Email　lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

©2013 Keio Research Center for Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。
ISSN 1880-3628
ISBN 978-4-903248-45-5